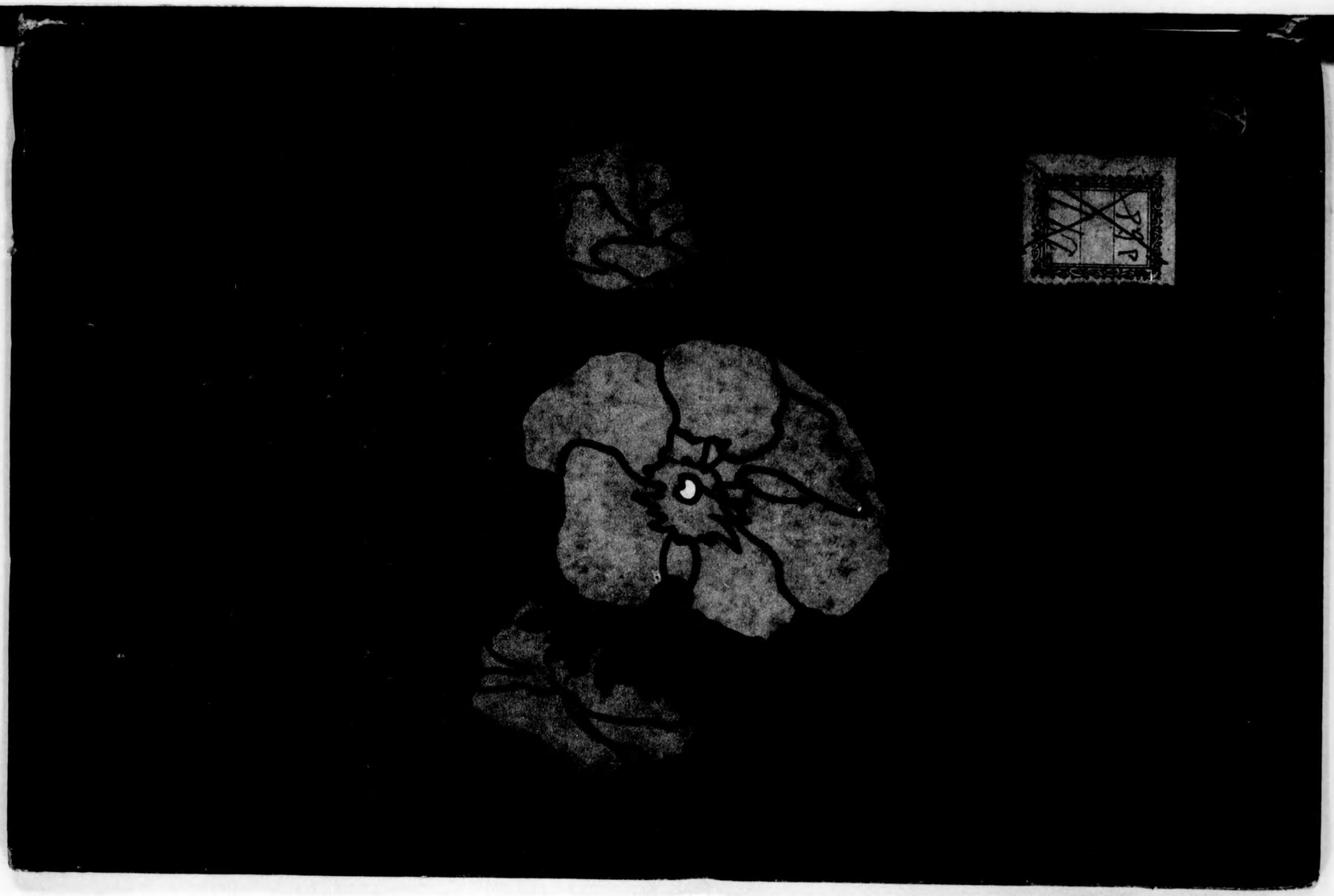
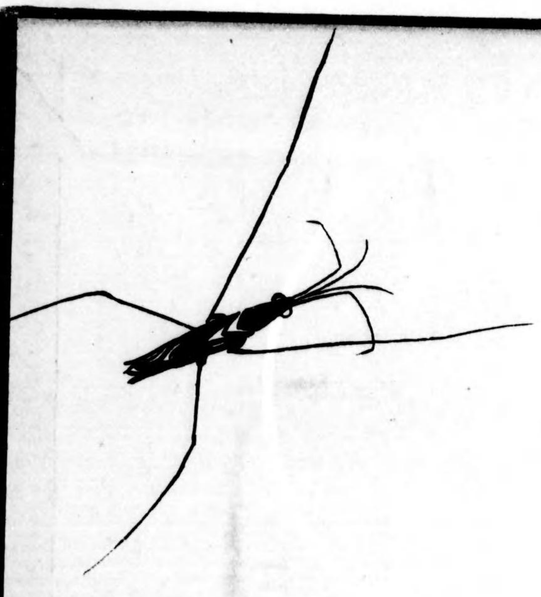
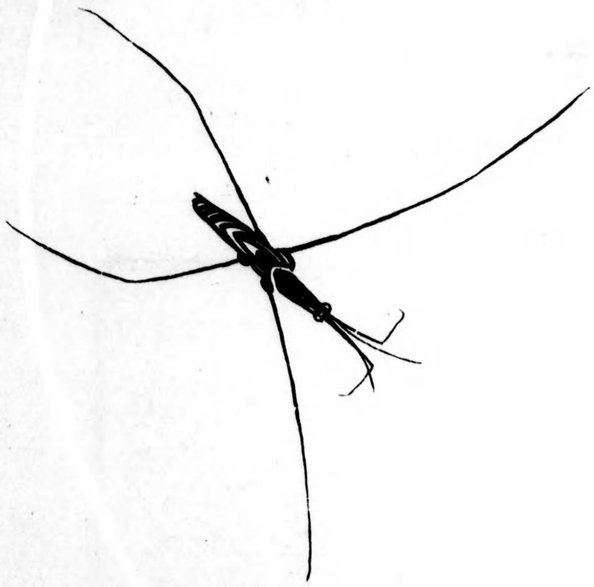
投



柚の花の力





特104
175

篠原嶺葉著

林水音畫

悲劇小說

かわかぬ袖

（後篇）

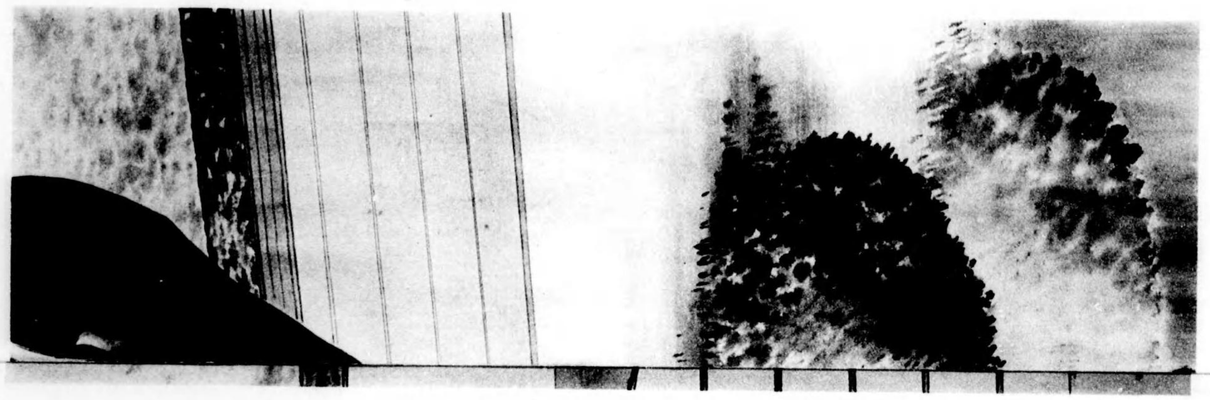
大正
4. 9. 25
内交

はしがき

あさましき姑の心かな、我子の愛に心は闇となり、一點曇なき、清き〳〵義理ある嫁を苦しめ、遂には悪しき企計して、可愛氣盛の孫ある中を、無情にも離縁せり。相思の良人は遠き巴里の旅にあり、恃む弟は他の情に辛くも修學しつゝある身の、去られて歸る家だになき可憐の彼女は、乾すよしもなき濡衣を、誰に訴へ誰に語らん便もなく、心も狂はしく、よゝとばかり涙に咽びぬ。かくして彼女の袖には、春の曉、秋の宵、永へに乾かぬ涙の雨を宿しぬ。

大正乙卯初秋

抱龍閣主人　瓏　誌



悲劇小説

かわかぬ袖

後編

篠原嶺葉著

二三　濡衣

『誰方か御來客があるのぢやないかね。』

入つて來たお角は、別莊番夫婦へ挨拶した後恁う問ねた。すると女房が、

『はい、大村樣と仰やる方がお越しなさいまして唯今御話中で居らッしやいます。』

『唯今此方へ來ながら眺めたのに、羽織を召した男子の方が、門をお入りに成つたやうに見受けたが、それでは僻目ではなかつたのね。その大村とか仰やる方は、これまでも訪ねて入來しッた事があるのかね。』

『いゝえ、今日初めて入來しやいましたんでございます。』
『若いお方かね。』
『はい、まだ三十前後のお方で居らッしやいます。』
『何の御用で入來しッたか、それは伺はなかつたかね。』
『はい、それは伺ひませんでございました。』
『大村さんなんて、聞いた事もない方だが、どうして那樣方が訪ねて入來しッたのか知ら……』と不審さうに考へて、
『何のお座敷へ御案内しました。』
『奥の客室へ御案内申せと仰やいましたから、客室へお通し申しました。』
『客室へ!? ……深雪が通せと言ひましたか……まあ何ういふお客樣か知ら……それではね、私が密と御樣子を見て來ますから、知らさなくとも宜ござんすよ、折角お話して居るところを、私が來た爲に妨げるのは氣の毒ですからね。』

言ひ棄て、勝手知つたる客室の方へと進むのであつた。そうして今や大村と深雪が對談しつゝある客室の次の室に忍び入つて、襖際に身を寄せて、凝と耳を欹てるのであつた。客室の中では、大村の聲が聞えた。
『私の希望といふは、他の事ではありません、日外途中でお目に懸つた節にも申上げた通り、貴女に對する戀は、今も彼の當時も少しも變らないのみならず、今日のお姿を見れば、寧ろ情熱が度を加へて來た如く感じます、しかし今日では、最早あの當時の御令嬢ではなく、保科家にお嫁付になつて既に愛らしいお兒樣までお在りなさるんですから、如何にお慕ひ申せばとて、結婚を望んだところが、到底實行されるものぢやありませんから、殘念でもそれは忍びます、その代りに切望私の戀を容れて、愛情が受けて貰ひたいのです、恁う申せば、大層無理を强ふるやうにお考へでせうけれど、保科夫人たる貴女に、愛情を受けて下さいと迫るのは、事實無理である事は私も能く知つてゐるのです、知つて居てしかもこれを

強ふるといふのは、私の心中に忍ぶ事のならない熱烈な情火が燃えて居るからです。のみならず、貴女にしても一身の浮沈に關するほどの一大事をお知らせするのですから、犧牲的報酬を下すつたからと申して、それは當然だと思ふです、ですから私の希望をお容れ下さるか否やの御確答を聞いた上で、貴女に關する一大事件をお話致します。』

大村の希望を聞かない以前から、斯くあるべしと豫期して居つた深雪は、餘り駭く樣子もなく、極めて沈着拂つた態度で、

『それでは私に關する重大な惡謀を聞かして遣るから、その報酬として節操を破れと仰やるんですね。』

『然う反問されると、聊か汗顏しますが、まあ〳〵然ういふ事に歸着しますね。』

『あのお辭に從へと……それを承かなければ、私に關する話もして遣らないと、斯う仰やるんですね。』

念を推すやうに言つた。

『彌ち然ういふ理由ではないですが、しかし諺にも他我に辛ければ、我又他に辛しです、私がこれほど熱烈にお慕ひして居るのを、同情して下さらなければ、私だつて、同情する事は出來ないぢやありませんか。』

『……』

深雪は無言のまゝ、熟と思案に沈んだ。その態度を見て取つた大村は、決斷を促すやうに、

『御注意までに申上げて置きますが、貴女の一身は、到底永く保科家に居る事のならない危機に迫つて居りますから、若し飽まで保科夫人の地位が保つて行きたければ、この際敵の機密を知つて、その手段に乘らないだけの、豫防する必要があるのですよ。』

と言ひ添へた。深雪は漸く顏を擧げた。

『しかし大村さん、永遠に遂げられない戀の爲に、女德を傷け、節操を破らすといふ事は、貴方も本意でないでせうし、私は固より死ぬにも增した苦痛なのですから然ういふ戀愛問題は全然仰しやらないで、他の報酬でお話し下さいませんか。』

大村は遮るやうに、

『いゝえ、私は貴方に對する戀を遂げるのは、本意でない所か、非常な滿足と愉快を感ずるです。ですから假令永遠に遂げられなくて、唯の一時にしても、これに優る希望はないです。』

『ですけれども、それでは眞の御愛情ではなくて、仇情ではありませんか、眞實私を愛する御精神がお有りなさるのなら、永遠に遂げられない戀を遂げて、私に苦痛をお與へなさるよりか、互の心で樂んで居るのが、どんなに愉快だか知れないぢやありませんか。』

『ですけれども、それは言ふべくして行はれない事です、互の愛情を表明するには

他に手段は無いですからね、それとも終生互に愛し合ふといふ、確な保證を見せて下されば、强ち貞操を破らうとは言ひませんが、その保證を與へて下さる事が出來ますか。』

『何ういふ保證すれば宜いのです。』

『月に二回宛、何處かで密會して、愉快に語り合ふといふ、その保證を約して下されば、貞操を破る事だけは斷念します。』

『……』

深雪は又もこの難題を持出されたので、頓には答ふべき辭が出なくて、無言のまゝ考へるのであつた。大村は深雪の美しい容貌と艶麗なる風姿とに打たれて、言ひ知らぬ快感を覺えつゝ、恍乎と瞶めてゐたが、彼が野獸的情慾は、殆ど高潮に達して血管は脈々として、湧き返つてゐた。深雪はやがて決心したやう、

『保科が洋行中こそ、月に一回や二回は、何とかしてお目にも懸れませうけれど、

歸朝した後は、到底實行は出來かねますから、お約束申したところがそれはお約束に止まつて、何の効力も無い事だと思ひますが、それを御承知下さるなら、お約束だけは致します。』と答へた。

『約束だけでは困りますから、それでは永遠にとは言ひませんから、左に右この際私の戀をして滿足さして下さい。』

『ですけれども、それは保科へ對して何と仰やつても應じる事は出來かねます。』

『それでは、一大事件は聞かなくとも宜いと仰やるんですね。』

人の稀な廣い別莊は、深夜の如く靜まり返つて、低い聲で語り合つて居る二人の聲が、普通の聲以上に聞える。室外に立つて、耳を澄して居るお角は、息を殺して聽いて居た。

深雪は大村から、一大事件は聞かなくとも宜いかと迫られて、今更のやう胸を騷がせた。それもその筈で、蛇蝎のやうな大村と、可厭な會見を遂げる決心したのも、

己に對する姑の惡謀奸計が聞きたさの一念からである。嫌な思を忍びながら、折角會見して、聞きたい事を聞かずに別れるのは、この上もない恨事である。のみならず、大村の辭から想像する時は、今にも身の破滅が眼前に迫つてゐるやうにも思はれて、魂が身に添はない心がする。と言つて、大村が希望を容れるのは、姑の惡計に陷るよりも、一層苦痛であるから如何答へて、この難關を圓滿に切拔けやうかと一方ならず苦心するのであつた。

その躊躇逡巡する狀態を見た大村は堪へかねたやう、

『それほど決心が付かないものなら、これまでと諦める外ありませんから、殘念ながらお別れして歸ります、しかし深雪さん、別れに臨んで、一言申遺して置きますが、私は今日希望が達し得られないからと言つて、貴女に對する戀を斷念するものぢやありませんから、萬一です、萬一保科家に居られないやうな、危難にお遭ひなすつた節は、及ばずながら滿腔の熱誠を捧げて貴女の爲に盡しますから、

必ずお知らせを願つて置きます。どうも失禮致ました。』

潔く立上つた。この時まで熟と思案に沈んでゐた深雪は、それと見るより、慌てて、

『大村さん、それでは何うあつても、話しては下さらないんですか。』裾を捉へた。

『いゝえ、話を致やうと思つて來たのですから、話すどころではない話してお聞かせしますが、自分の身に關る一大事件のみ聞いて、私の希望を皆な拒絶なさるといふは、餘りに蟲が良過るぢやありませんか、茲です、茲が所謂我身を抓つて他の痛さを知れです、折角お目に懸りに來たのですから、私の希望さへ承いて下されば、直に詳しくお聞かせ致ますが、何うあつても私の希望を承容れて下さらないですか。』

『ですけれども、それでは女の道に背いて、一生良心の苛責に苦しまなければならないんですもの、可愛相ぢやありませんか。』

『だつて關係を永久に續けやうといふのではなく、希望さへ遂げさせて下されば、それで斷念すると言ふのですから、二人の秘密として守りさへすれば、良心の苛責に苦しむ事ないぢやありませんか。』

『ですけれども、その秘密が既に良心を苦しめるぢやありませんか、那樣無理な事仰やらないで、どうか話して聞かして下さいな、終生の恩人として、決して御恩は忘れませんわ。』

『それほど聞きたければ、これほどに慕つて居る、私の希望を何故容れて下さらないんです、深雪さん、私の戀を承容れて下すつたからとて、貴女を苦しめるやうな那樣大村ぢやありませんよ、這麼好機會といふものが、再度得られるものぢやないですから、どうか私の希望を容れて下さい、承諾さへして下されば、惡魔の企畫を皆な知らして上げますよ。』

言ひつゝ、裾を捉へた深雪の手を緊と握つた。深雪は忽ち胸を轟かしつゝ、惡魔に

でも捉へられたやう、

『あら大村さん何なさるんです、そんな亂暴なすつては困ります、どうか放して下さい。』

振放さうとしたが、戀に狂ひつゝある大村は、耳にもかけず力任せに引寄せて、矢庭にその場へ押倒した。深雪は憤懣しつゝも身分を顧みて、聲を立てる勇氣もなく虎口を遁しやうと藻掻くのであつた。この刹那であつた、お角は颯乎と襖を排けて中へ入つた。

襖の開いた音に駭かされた兩人は、同時に振返つたが、思ひがけないお角が突立つたまゝ、鋭い眼附をして眺めてゐたので、先づ大村が極り惡げに立上つた。深雪は泣くにも泣かれぬ耻しさと駭とに、顏は忽ち死灰色となつて、顫へながら裾の亂れを搔合せつゝ起上つた。同時に大村は、

『深雪さん、とんだ失敬致ました、御來客がおありなさるやうですから、私はこれ

で失禮致ます。』

と挨拶さへも匆々に、遁げるが如く室を出た。深雪は周章て、

『大村さん、今暫く居て亂暴なすつた證明して頂かないと、私が困ります。』

と引留めやうとしたが、聽こえぬ態をして歸り去つて了つた。お角は開けた襖をぴたと閉めて靜に座に着いた。

『お樂みの邪魔をしてお氣の毒でしたね、私は直に歸るから、呼留て置いて、十分にお樂みなさいよ。』

冷笑ひつゝ言つた。深雪は我身の破滅が迫つたやうに感じて、暗涙を泛べつゝ、

『とんだところをお目に懸けまして、相濟みませんでございます、定めて怪しい人でも引入れて、道ならない事でもしてゐるやうに思召すでございませうけれど、決して然ういふ理ではございませんので、別莊番にお聞き下すつても分りますけれど、先刻始めて入來したばかりで、あゝ言ふ亂暴な事なすつたものですから、

どう致したら宜いか知らと困つて居た折柄へ、圖らずもお越し下さいましたので漸と助かりましてございます、どうかお疑ひお晴らし下さいまし。』

と挨拶した。

『一体あの方は何方の人で、何用あつてこの別莊へは入來つたんです。』

『あの人は大村虎一と申しましての私の父が存生中食客に置いた者でございますが、昨日町へ買物に出まして、歸るさに、偶然久々で出會ひましたところが、是非お目に掛つてお話致たい事があると申しますから、それでは明日でも訪ねて來るが宜いと、この別莊に來て居る事を知らせましたら、今日訪ねて參りまして、有らう事か有るまい事か、私に向ひまして、猥りがましい事を言ひかけました末に突如にあゝいふ亂暴を働きかけましたので、困つて居た折柄へお越しなさいましたのでございます。』

『然うですか、それでは以前から知合の仲で……然うでせうとも、それでなくて何

が何でも久し振に會つた人が、あんな事が出來るものぢやありません、とんだお邪魔してお氣の毒でしたね……私は這麽お樂みがあるなぞとは知らないものだから、お前さんの病氣を氣遣つて故々見舞に來ましたが、恁ういふお樂みが出來るやうでは、病氣も餘程快いと見えますね。』

飽迄道ならない不義を行つたやうに言ふ。

『それでは母樣は、飽まで私が道ならない事をしたと思召すのですか。』

と口惜しさうに問ねた。

『お前さんも隨分厚皮しい女だね、思ふも思はないも、現場を見られながらまだ私を誤魔化す量見かね。いくら私がお善人でも、あゝいふ所を見せられては、どんな關係位は分りますよ。』

『まあ隨分な事仰やいますわね、現場を見たと仰やるけれども、それならば尙更亂暴な目に遇つてゐて、抵抗してゐた事を御存じの筈ぢやございませんか、召使の

手前があるものですから、聲こそ出さないで居ましたけれども、力限りの抵抗して防いで居ましたわ。』

『口は調法なものですね、あれほどの醜態を見られながら、まだ辯解が出來るのですからね、なるほど斯ういふ目的があつての、轉地療養だから、女中を勸めて連れて來なかつた筈ですね、漸く解りましたよ。』

お角が飽まで姦通した如く認定する辭に敵しかねた深雪は、

『あゝ言ふところを見られたのは、私の不運でございますけれど、心の潔白は神樣に誓ひをかけて僞りは申しませんから、どうかお疑ひをお晴らしなすつて下さいまし……』

と泣き出した。お角は被せるやうに、

『疑ひを晴らすと言ふのは、事の實否が知れない場合に言ふ事で、現在のやうに實地を見られた場合に言ふ辭ではありません……お前さんは、やゝともするとお泣

きだが、良夫の留守中に他し男と會曳をするほどの度胸にも似合はないぢやありませんか……しかし深雪さん、涙を止めて能くお聽きなさい、お前さんの身は泣いて居る場合ではありませんよ、幽吉はお前さんを好で貰つたのだから、道ならない事をされても、知らない限りは鼻の下を延ばして居るでせうけれど、私が現在を見た限りは、親の義務でもあるし、留守を預つて居る責任上、このまゝには棄置けないから、改めて言ひ渡しますが、今日限り保科家を離緣致ますから、然う思つて下さい。』

と嚴として離緣を宣告した。かゝる出來事がなくとも、惡謀を運しつゝあるお角の事であるから、或は不幸な結果に陷りはせぬかと、それのみ心配して居た深雪は、この宣告を聞くが否やよゝとばかり泣き伏て了つた。お角は惡計の成功を心に欣びつゝ、煙管を取出して、悠々と煙草を喫し始めた。庭の叢の中から蟋斯の鳴くのが、又なく悲哀に聞えた。寸時は寂として、お角が吐月峰を敲く音と、深雪の絕え

入るやうな泣聲のみ響いて居たが、やゝ經た後、涙ながらに顏を擧げた深雪は聲曇らせつゝ、

『御腹立は御有理ですけれど、決して女の道に背くやうな事、致した覺ございませんから、どうか御勘辨なすつて下さいまし。』

と詫るのであつた。

『私は開盲ぢやありませんよ、那麼醜態を見られながら、女の道に背かないものだ、餘り莫迦に致なさんな……』

『いゝえ、何と仰やつても、私は潔白です、女の道に背いた覺えございません、成程あゝいふ不品性な男を、いくら以前の食客にしろ、この別莊に入れたといふのは、私の不行屆でございましたから、その點に就いてお叱を受けるのは、致方ございませんけれど、女の道に背いた爲に離緣すると仰やられては、何うあつても御意に從ふ事出來ませんから、どうか幽吉さんが歸朝されるまでお待なすつて下

さいまし。』

『お前さんは幽吉を誤魔化して、このまゝ保科家に居る量見か知らないが、幽吉が何と言はうとも、親の私が許しませんよ、お前さんは自分一人で潔白だ潔白だと私を言ひ伏せやうとして居なさるが、まあ胸を靜めて考へて見なさい、知つた人が用向があつて面會に來たなら來たとして、普通の話ならば、何故應接室へ通さいのです、況して訪ねた來た人は、お前さんの家へ食客して居た人だといふではありませんか、して見れば謂はゞ主從の間柄も同然でせう、そんな取るに足らない人間を一等與座敷へ連れ込んで、二人相對ひで話をするさへ、憚るべき事であるのに、引組合つて寢轉んで居たら、私でなくとも誰が見たからッて、關係があるといふは當然の事ぢやありませんか、設令一歩讓つて、お前さんの言ふ通り怪しい關係が無かつたとしても、在つたと言はれて辯解の辭がありますか、私の辭が無理だと思ふなら、誰方になりと有のまゝを話して聞いて見て貰ひなさい、決

して潔白では通しません、私は確に潔白でないと認めたから、親の權利で離縁するのですから、今日限り歸つて下さい。そうして不服な點があるなら、裁判へでも訴へて不服な點を晴らすが宜いでせう。』

二四　決心

頑として應ずる氣色のない、お角の態度を見て取つた深雪は、大村の辭を思ひ合して熟と思案に沈んだ。秋の日はいつしか西に落ちて、時計は五時を告げた。

やゝ寸時して深雪は、漸く顏を擧げたが、決心したのであらう、今まで滂沱として流れて居た涙も見えなかつた。

『それでは、これほどまでに申上げても、私の潔白はお認め下さらないんですね。』

『又しても潔白々々と、それほど潔白な人が晝日中男を引入れて、抱寢しますか、他を莫迦にするにも程があります。』

と罵り返した。

『私は神かけて道に背いた覺ございませんけれど、それが爲に何うなつても離縁するから、歸れと仰やれば致方ございませんから、殘念ながらお辭に從ひますけれど、どうか文子の御養育だけは、幾重にも宜しくお願ひ致します。』

と挨拶した。

『文子は保科家の大切な小兒だから、そんな心配に預らなくッても、十分に育てますよ。』

『左樣なれば、これから準備致しまして、終列車かその前の列車で歸りたいと存じますから、それまで御猶豫下さいまし。』

『何有、斯う事が極つた上は、今夜に限つた事ないんだから、私は小兒を連れて、これから直に歸りますから、お前さんは、緩々支度して明日にした方が宜いでせう……』

『有難うございますけれど、日中は何となく氣耻かしく感じますし、少し考へた事もございますから、今夜の中にお別れ致します、どうか幾久しくお榮え遊ばすやう、蔭ながらお祈り申します。』

と嫋かに挨拶した。

『何事も約束事と諦めて、お前さんも折角大切になさるが宜い、荷物は屆先さへ知らして下されば、私の方から取纏めて送りますからね。』

『御厄介でございませうけれど、宜しくお願ひ致します。』

『それでは、私はお前さんを見舞ながら、小兒を見に來たので、何でも彼でも歸つて往かなければならない用向がありますから、これから文子を連れて歸京しますから、後で寛り支度なさるが宜い、小兒は何方に居ませう！』

『小兒は彼方に寢さしてございますから、唯今連れて參ります……』

と己が部屋と定めてゐる、南向六疊の室に入つた、見れば文子は、すや〳〵と心地

快げに睡つて居た。深雪は睡つたまゝの文子を抱き起して、熟とその愛らしい顏附を瞶めてゐたが、覺えずはら〳〵と落涙した。

『文さんよ、お前さんは何にも知らないで、すや〳〵と睡つて居るけれども、この母さんとは、今を限りに一生のお別れなんですよ、どうか皆なに可愛がられて、無事に大きくなつて頂戴ね……』

と眼醒めし人に物言ふ如く、涙ながらに別を告げて、やがて牛乳の支度を調へてお角の居る奥座敷へと抱へて往つた。

『能く睡つて居ますからその儘抱て參りました、睡るだけ睡らせないと、起てから憤りまして困るんでございますよ。』

『宜ございますよ、この儘抱いて俥に乘りますから、牛乳さへ遣れば困るやうな事ないでせうよ。』言ひつゝ抱取つた。

『牛乳も支度してございますから、眼を醒したらお與り遊ばして下さいまし。』

と グラス瓶に入れた牛乳を渡した。

『唯今俥を頼みに往かしたから、私は直に歸りますが、お前さんは後で寛々支度するが宜ざんすよ。』

『はい、有難うございます。』

『何なら私と一緒に一應宅へ歸つて、荷物なぞの仕末してそれから歸る事にしては何うですか。』

『皆様へ會はす面目がございませんから、荷物の所は御厄介でせうけれど、何分にも宜しくお願ひ申しまして、私は今夜限りお別れ申す事に致します。』

『それでは御勝手になさるが宜い、そうして戸籍も送る先さへ知らして下されば、明日にも手續致ますから、何時なりと知らして下さい。』

『はい、どうか宜しくお願ひ申します。』

かゝる話の折柄へ、別莊番の女房が來て、

『お俥が參りましてございます。』

と告げた。

『それは御苦勞でした、唯今直に歸るから、寸時待たして置いて下さい。』

『御緩りで宜しうございます。』

と女房は去つた。お角は挨拶さへも匆々に、文子を抱いて玄關先へと出た。同時に蟲が知らせたか、文子が眼を醒してワッと泣き出した。にも拘らず待受けて居た俥に乗つて了つた。深雪は伸び上るやうにして、文子の顔を眺めやうとしたが、黄昏時であつた爲に定かに見る事は出來なかつた。その中に俥は早くも梶棒を上げて馳せ出して了つた。それを見送つた別莊番の女房は怪訝な顔をして、

『奥様、お嬢様を何方へお連れ遊ばしたんでございます。』

と問ひかけた。深雪は些と答へに窮したが、忽ち思ひ附いて、

『急に東京へ歸らなければならない用向が出來たので、母様が故々迎へに來て下す

つたけれど、私は此方の用向を濟して歸らなければならないものだから、先へお連れを願つたんですよ。』

『まあ、左樣でございますか、それで這度は何時頃お越なさいます。』

『それがまだ歸つて見ない事には知れないんですよ、此方へ來たお蔭で、脚氣も餘程快く成りましたから、今暫時來たいとは思つて居るけれども、ひよッとしたら宅の都合で來兼るかとも思ひましてよ。』

と曖昧な返事をした。

『左樣でございますか、どうか御都合がお付なさいましたら、又どうぞお越しなすつて下さいまし。』

『都合さへ付けば、必ず來ますよ。』

『それでは、お俥を然う申しませうかね。』

『いゝえ、まだ少し用事もあるし、町へも出て來なければなりませんから、俥はも

つと後に頼みますわ。』

『それではお宜しい時、仰やつて下さいまし。』

『有難う……』

と深雪は別れて奥へ入つたが、堪へ忍んだ悲哀が一時に湧き返つて、しどなく泣き崩れて了つた。が泣き伏しながらも、一身の進退に就いて、決心を堅めるのであつた。

『心に少しも疚しいところは無いけれども、大村があゝいふ亂暴な行をしてゐる時折惡しく入つて來られたのだから、女の道に背いたと、濡衣を着せられても、それを辯疏證據が無いんだから、不幸と諦める外ないわ……先日以來何彼につけて苛めて居らした折柄へ、生憎あゝいふ場合を見附けられたのだから、離緣されるのは覺悟して居たけれど、幽吉さんにまで、不貞な女と思はれるのが如何にも殘念だ……のみならず無情な姑は、今日限り離緣するから歸つて往けと言はれるけ

れど、歸つて往く家の無い事は、百も承知で居らッしやりながら、あゝいふ思ひ遣りのない事仰やるんだもの……餘り情なくなつて泣くにも泣かれないわ……それは弟も御厄介になつて居る事だしするから、瀧澤先生のお宅へ往つても、當分位は厄介を見て下さるであらうけれど、他の事で離緣されたのと違つて、無實にしても女の道に背いて、それが爲に離緣されたと言つては、何う考へても往かれない、と言つて外に便る先はなし……彌張決心通にする外ないね……しかし私が死んで了へば、便少ない弟がどんなに落膽するであらう、あゝいふ氣の優しい人だから、悲嘆の餘り自暴自棄を起して、前途を過るやうな事ないか知ら……彼の人が自棄でも起さうものなら、それこそ東家の復興は思ひも依らない事だからそれが何より案じられるけれど、然うかと言つて、世間へ對して生て居られないこの軀だから、弟には落膽しないやう又東家の復興を一念に計るやう、懇々と遺書を送る事に致やう、本來なれば一應東京へ歸つて、會つて別れが致たいけれど

も、もう〳〵東京へ歸る勇氣が出ない……吁々僅二十歳やそこいらで死ぬなぞとは思つても見なかつたが、思へば短い生涯であつた。しかし人間は何うせ一度は死ななければならないものだから、二十歳で死ぬも、百歳で死ぬも、長く現世に居るのと、短く居るのとの差で、死といふ事に變りはなし、生て居ればこそ樂い思をする代りには、氣象苦勞を致なければならないけれど、死んで了へば樂みもない代りに、一切の苦痛を脫れて了ふから寧そ安心かも知れないわ、唯心に繫るのは文子の事と弟の事だけれど、文子の事は、幽吉さんと夏子さんにお願ひして置けば、屹度可愛がつて青て〻下さるであらうし、弟は自重して東家を復興するやうに、懇々諫めて置けば、豈夫自棄を起すやうな事あるまいから、夫々へ遺書を認めて送る事に致やう……』

と料紙と硯箱とを取出して、涙ながらに認めるのであつた。やゝ一時間を費して、幽吉と胖と、夏子と、雪山とに宛た四通の書面を認め了つた後、有合せの郵便切手

まで貼附して投函するばかりにした。そうして又默然と考へ始めた。

『死ぬ決心は致たものゝ、何ういふ手段を採つて死んだものか知ら……願はくは死骸を發見されたくないものだが、噴火口の中へでも飛び込んで死なうか知ら……しかし噴火口と言へば、この邊では淺間山にでも登らなければ、他には些と無いやうだから、直に死ぬ理に行かないから、彌張他の方法を撰む外ないけれど、毒藥を服用するか、縊死するか、氣管を切斷するか、轢死するか、投身するかだけれど、亡骸を見られないやうにするには、滿潮を見計つて、海中へ投身する外、他に手段は無いやうに思はれる、幸ひ八時頃は滿潮時だから、海岸に往つて身を投げる事に致やう……』

と自殺の手段を決した。そうして衣類を改めた後、別莊番の夫婦に向つて、

『町まで用足しに往つて來ますから、賴みますよ。』と挨拶した。

『お供は宜しうございますか。』

『馴た道だから一人で澤山ですよ。』

言ひつゝ懷中から紙包を取出して、

『これは本の僅少だけれど、種々世話をかけたお禮の驗だから納めて置いて下さい忘れると可けないから早く上げとくわ。』

と渡した。

『こんな御心配下さらなければ宜しうございますのに、折角の思召しですから、有難く頂戴して置きます。』

と夫婦共々厚く禮を述べた。かくて深雪は暗の道を海岸の方へと急ぐのであつた。時は七時を過ぎて、やがて半にも成らうといふ時であつた。途すがらも深雪は大村の事、お角の事など思ひ泛べて、怨まずには居られなかつた。

『大村さへあゝ言ふ亂暴しなければ、恁ういふ運命にはならないものに、會つて怨が言つて遣りたいけれども、考へて見れば私にも缺點があるのだから、運命と諦

めて了ふわ……それにしても母様は、何用あつて入來しッたのか知ら、見舞に來たと仰やつたけれど、どうも信じられないわ……彼方が私を見舞に來る道理がないからね……』

二五　囁き

東京に歸るべく文子を連れて別莊を出たお角は、途中まで出るゝ、車夫に向つて、

『車夫さん、三橋へ寄らなければならない用向があるから、些と寄つて下さいね。』

と辭をかけた。

『承知致しました、旅館の三橋ですね。』

『は、然うですよ。』

俥はやがて、長谷の旅館三橋へ着いた。文子はと見れば、牛乳の乳首を咬へて頻りに吸入してゐた。お角は俥を降りるが否や、中に入つて、滯在中の大村虎一に面會

を申入れた。すると間もなく案内されて、二階の一室に通された。其處には大村が首を長くして待受けて居た。

『大層長くかゝつたぢやありませんか、餘り長いものですから、形勢の觀望に出かけやうと思つた位でした、さあどうぞ此方へ……』と低聲で言つた。お角は言はるゝ儘座に着いて、

『そんなに長いとは思はなかつたのですけれど、それでもね言ふだけの事を言はなければ、宣告する理に行かないものですから、知らない間に長く要つたのです。』

『それは御有理千萬です、しかし解決が着きましてございますか。』

『は、左に右辛と宣告して、承知はさせましたけれど、何だ彼だと文句を並べるものですから、隨分骨が折れました。』

『然うでせうとも、豈夫に仕組んだ演劇とは知らないから、離緣されやうなぞとは意外中の意外ですからね、しかし私の演り方御覽下すつたでせうけれど、役者は

我ながら旨いものだと自惚てゐますが、如何でした、事實らしく見えなかつたですか。』

『眞箇お手に入つたものですね、何うして仕組んだ事なぞと見えるものですか、あれでは誰だつて一杯かゝりますわ、屹度あの手でこれまで度々お行りなすつた事あるのでせう、私感心して聞いて居ましたわ。』

『御笑談仰やられては困りますね、度々どころか、臍の緒切つて眞箇初めてです、元來無粹に出來上つて居るものですから、あれだけの演劇を遣るのに汗を搔きました。それで何ういふ事に結末が着きましたか知ら……』

『今日限り離縁すると飽まで主張致ましたところが、辛と承諾して今夜遲くも東京へ歸ると言ひますから、貴方にその事をお知らせ致やうと思ひまして、一歩先にこの小兒を連れて歸ると言つて出かけたのですのよ、ですけれど御承知の通り、歸ると申したところが、實家は潰れて無いですし、これと言ふ親戚もありません

から、差當り弟の厄介になつてる家へでも、便る外ないと思ひますけれど、それも礪とは知れないのですから、今夜歸つて往く時に、旨く手に入れなければ行先が分らなくなりますよ。』

『然うですか、今夜の中に歸りますか、それでは油斷なりませんが、何時の列車で歸るかそれは御存じないでせうね。』

『は、それは分らないのです、もう今夜から自由行動を取つても宜い軀に成つたのですからね。』

『ではこれから御別邸の近所へ往つて、監視致なければならないですね。』

『然うですよ、何時歸るか知れないんですからね、しかし大村さん、あの御樣子では、御成功疑ひなしですよ、お樂みですわね。』

と厭な眼附で眺めながら微笑んだ。

『なか〳〵あれで頑固ですからね、成功するか何うかは頗る疑問です。』

『だッて彼の際邪魔を致なければ、どんな結果に成つたか分つたものぢやありませんわ、生娘ぢやないんですもの……』

『これまでの苦辛を嘗めたのですから、成るか成らないかは知れかねますけれど、左に右、腕に撚をかけて、行つて見ます。』

と大村も成算あるがやう、微笑つゝ言つた。

『貴方の腕なら屹度成功するに極つてゐますよ、何故かと言へば、彼女には歸つて往くべき家がないと言ふ、弱味が在るんですから、その弱味へ附込んで、優しい辭をかけて同情して遣つて御覽なさい、いくら悧巧だの堅いのと申しても、其處は女ですもの、以前からの行懸りもある事ですから必ず靡くに極つてゐますわ。』

とお角が煽てるやうに言つた。

『何有豈夫の節には、施すべき手段がありますから、十中の八九まで大丈夫だと思ひます。左に右この機會を逸しては、何彼に不便を感じますから、これから直に

網を張る事に致しませう。』

『然うですとも、取逃がしたら、何處へ身を隱すか知れませんから、取逃がさないやうになさいませ、私はこれから歸京致ますが、今夜の結果に就いては、お目に懸つて詳しく承はる事に致しませう。』

『成否に拘らず、明晩までには必ず歸京しますから、事の顚末はその上でお話しする事に致します。』

『それではこれでお別れしますから、貴方も早くお出かけなさいまし。』

『直に出かけますが、しかし奥樣、軍用金が少々不足ですから、お持合せがありますなら、少々ばかり拜借爲たいですが、如何でせうね。』

『直に歸る意で來ましたから、澤山な持合せはありませんが、幾等ばかり御入用なんでせう。』

『左樣、三十圓もあれば、何うにか間に合ふと思ひます。』

『その位なら持合せて居ますから、差上げて置きませう。』

と、三十圓の金子を渡して、やがて別れて飯京して了つた。大村は滿面に笑を湛へて、

『果報は寢て待てといふが、實際齷齪藻掻くものぢやないね、お角さんが慾望を出したばつかりに、先日來意外な金子が手に入つたばかりでなく、恁うして十日間も鎌倉へ來て遊んだ上に、生命までもと思ひを掛けた深雪を、手に入れるなんてどこまで好事が續くか知れたものぢやない、鎌倉での運動費として受取つた百圓の金子が、半額は殘ると思つて居るのに、又三十圓追徵して遣つたから、いくら贅を盡しても五十圓位は殘るだらう……それにいよ〳〵深雪と世帶を持つ場合には、權柄づくでも三百や五百は借りて遣るから、先づ當分不自由を感ずる心配はないが、しかしだ、口でこそ希望が達し得られるやうに言つたものゝ、彼女は意外に志操堅固と來て居るから、いくら飯る家がないからと言つて、はいそれと應諾

する氣遣ひはないが、若し容易く應じない場合は何ういふ手段を採つたものか知ら……左に右誠心誠意同情するやうに見せかけて、この旅館へ連れて來るのだねその上で辭を盡して口說いて見て、それでも應じない節には、止を得ないから非常手段を實行して、否應無しに屈伏させるのだね、一度屈從させた上は、もう此方の自由だからね、しかし今夜といふ、好機會を逸してはならないから、左に右出かける事に致やう。』

と直に旅館を出て、保科家の別莊へと急ぐのであつた。十月の始ではあるが、日中が小春日のやうに暖かであつた爲に、夜に成つてからも風のない寔に氣持の快い氣候で、漫歩きする人がちら〳〵と見える。

別莊の門前近く進んだ大村は、中の樣子が知りたいために、耳を澄して聞いてゐたが、叢に鳴く蟲の音のみ喧すしく起つて、邸内は人の氣勢もなく靜まり返つて居た

『ハテな、どうも靜か過るが、もう飯つて往つたのか知ら……まだ七時に成るか成

らないのだから、然う早く出發する筈ないと思ふがね、お角さんの話に依ると、餘程遲れるやうな樣子だつたからね。』

二六　海岸

大村は尙も不安な顏色をして樣子如何にと邸內を覗き込むやうにして、耳を傾けるのであつた。するとやゝ暫時經た頃、俄に人聲が聞えたと思ふと、燈火が玄關先を照して、美裝した深雪の姿が顯れた。

『まだ皈る筈はないと思つたが、果して然うだッた。これから皈るのか知ら……しかし皈るとしては、まだ俥が來て居ないが、何處か他へ往くのか知ら……』

斯う考へて見て居る中に、到頭外へ出て、門口へ向けて歩む樣子が見えた。大村は矢庭に傍らの木蔭へ身を潛めた。深雪は不覺に門を潛つて、すた〳〵と海岸を差して歩み出した。大村は見失はぬやう、見えつ隱れつして跡を尾け往くのであつた。

『變だね、何處へ往くのか知ら……この途は確に海岸へ出るより、外に往先は無いと思ふがね、それとも知つた人の別莊でもあつて、訪ねて往くのか知ら……』

不審を起しつゝ何處までもと、跡を追ふのであつた。が深雪は何處にも立寄らず、一直線に海岸へ出て了つた。そうして絕壁をなした崖の上から、折柄滿潮の海中を覗き込んで、寸時熟と眺めて居つた。この樣子を見た大村は、ぎよつとするほど驚いた。

『變だ〳〵と思つて居つたが、扨は離緣されたのを悲觀して、投身する決心と見えるな、這麼に苦心しながら、投身なぞされて堪るものか。』

恁う呟きつゝ、忍び足に近づいて、突如緊と抱留めた。人のありとも思はなかつた深雪は、吃驚して慄と身顫ひした。

『誰方か知らないけれども、どうか放して下さい。』

と振放さうと身を藻掻いた。

『けれども貴女身を投げて死ぬ決心なのでせう……』

『はい、何うあつても死ななければならない事情があるのですから、どうか自由に本望を遂げさして下さい。』

『それは惡い量見です、何ういふ事情か知らないけれども、死ぬのは何時でも死ねますが、一度死んだら、再びこの世には來られないのだから、まあ〳〵氣を靜めて篤りと考へて見なさい、失禮ながら斯うしてお救けするのも、何かの因緣でせうから及ばずながら甚麽御相談にも應じます。』

と力任せに崖際から引戻した。同時に少し隔つた彼方で、謠曲を唄ふ聲が寂た調子で聞えた。が忽ち蓼々と岸を嚙む怒濤の音に消えて了つた。

今まで精神が錯亂してゐた深雪は、意外の人に妨げられて、死ぬにも死ねぬ窮境に沈んだので、幾分か鎭靜すると共に、救けて呉れた人の聲が確に聞覺があるやうに思はれたので、將に昇らんとして居る月代の明に、凝乎とその人の顏を見た、が忽

ち吃驚して、

『まあ、貴方は大村さんぢやありませんか。』

『えゝッ、然ういふ貴女は、深雪さんぢやありませんか。まあ貴女は一体何うして斯ういふ短慮をお出しなすつたんですか、危いところへ出合せましたね。』

『私貴方にあゝいふ亂暴された爲に、道ならない不義をしたと思はれて、母樣から到頭離緣の宣告を受けましたから、世間へは面目なくて顏出しが出來ませず、宅へ歸らうには、實家は潰れてございませず、寧そ自殺して、身の潔白を證據立てやうと決心致まして、滿潮を見計つて身を投に來たのです、貴方に對しては、申し上げたい恨はありますけれども、死んで了ふ身ですから何にも申しません、その代りには、どうか止めないで死なして下さいまし、私生きて居るよりか死んで了つた方が、苦患を脫れて甚麽に淸々するか知れないと思ひますから、邪魔をされるのは眞箇苦痛です。』

と涙ながらに述べた。

『何と仰やつても、他人だッて救けなければならないのに、何うして貴女を殺すものですか。』

深雪は腹立たしさうに、

『それは貴方酷いぢやありませんか、私が死ななければならない境遇に沈んだのも謂はゞ貴方故ぢやありませんか……それを邪魔なさるといふは、餘りに同情が無さ過ぎると言ふものです、どうか見ない先だと思つて、決心通り實行さして下さいまし。』

言ふを大村は遮つて、

『私ゆゑに破鏡の悲しみにお遭ひなすつた結果、世を儚んで死ぬ決心をなすつたのであつて見れば、尙更見遁す理には行かないです、絶對に救けなければならない義務があるばかりでなく、貴女の將來を保護する責任があるのですから、深雪さ

ん、左に右死ぬといふ決心だけは絶對に飜して下さい、そうして貴女の意見も聞き私の意見も述べて、貴女の名譽を恢復すると共に、身の立行くやうに御相談仕やうではありませんか。』

『いゝえ、何と仰やつても、貴方のお言葉に同意する事はならないのです、それでなくとも不義を爲たやうに疑はれて、斯ういふ悲境に陷つて了ひましたのに、この上貴方と接近爲やうものなら、それこそ私の潔白を證據立てる道がなくなつて了ひます。御親切は感謝しますが、私は現世が厭に成つたのですから、何うあつても死んで苦痛が脱れたいんですから、もう何にも仰やつて下さいますな。』

と怨を制へて優しく謝絶した。

『しかしですね、貴女は死んで身の潔白を證據立てると仰やるけれど、それは貴女だけの考へで、一方から見る時には、それ見た事か、女の道に背いて申譯の途がないものだから、到頭身を投げて了つたと、斯う解釋するかも知れないです。し

て見るとます〳〵疑を確實にされる理ぢやありませんか、のみならずです、貴女は現世が可厭になつたから、死んで苦惱が脱れたいと仰やるけれども、それは餘りに舊思想に囚はれてゐなさる結果だと思ひます、貴女のお考へでは愛らしい小兒まである圓滿な仲を、離縁された悲哀と、歸るべき家がないといふ落膽と、將來は勿論、差當つて一身を何う爲やうといふ當惑と、もう一ッは女の最も尊重すべき筈となつて居る、貞操を破つたといふ疑を受けた恥辱とのために、厭世の極度に達した結果、死ぬといふ人間の最終が戀しくなつた事と思ひますが、しかし圓滿な家庭を離れて、戀しい良人や可愛い小兒と別れるといふ事は、人生の最大悲慘事ですから、この點のみには深く同情致ますし、貴女に於ても、何より苦痛に相違ないと思ひますけれど、これとても諦めやうでは、諦められない事はないです、世の中にはより以上に平和圓滿な家庭でありながら、親子個々に離別する人もあるのですから、かくなるべき運命と思へば、決して諦められない事はない

です、それから女の貞操といふ問題もです、習慣上結婚した以上一夫を守らなければならないといふ、法律にはなつて居るものゝ、女ばかり正直に守つても、男子の方では、勝手氣儘に他の女と遊んで居るではありませんか、そんな間違つた習慣や法律を、自主自由の人間が何うして守れるものですか、論より證據、新聞紙上で御承知でありませうけれど、今日世に貴夫人と尊敬されて居る、或人々を御覽なさい、俳優と公然手を把り合つて色に狂つたり、甚だしい人になると、自家の書生や出入商人と、怪しい噂を立てられて居るではありませんか、けれども社會は、深く不思議とも思はねば、不貞不節とも思はないといふは、社會の思想が舊來のやうに窮屈を免さなくなつて居るからです、ですから人の噂も七十五日の諺に洩れず、三四ヶ月も經つて御覽なさい、健忘性の社會は、直に忘れて了ひます。』

言ふ時月代を破つて月の光が照り初めた。

『畢竟餘りに世の中を杓子定規に考へ過て居らッしやるから、厭世思想も起れば、死ぬなぞといふ恐るべき決心も起るのです、ですから死んで了つた意になつて、今夜を新生涯の第一歩として、復活なすつたら宜いぢやありませんか、この愉快な世の中に生れながら、我から盛りの生命を果すなぞといふのは、餘りに狹量過るではないですか、偶然にも私のために不慮の災厄にお遇ひなすつた貴女を、又私が救けたといふのは、其處に何者かの深い因縁が含まれてゐるやうに思ひますから、左に右私の辭を用ひて、貴女の一身を私に任して下さい、決して惡いやうには致しません。』

と熱心に誘惑するのであつた。月は全く水平線上を離れて、明かに夜の自然を照して居つた。

『お辭は了解致ましたが、しかし設令決死の念を思ひ止ると爲しても、貴方の御厄介に預る事は、保科家へ對する義理合としても出來かねますから、どうか私の

軀は私の自由にさして頂きます。』

『それは何と仰やつても徒目です、私の目に留らなければですけれど、斯うして瀕死の危機を救つた以上は、飽まで貴女の一身を保護する責任がありますから、左に右私と一緒に私の宿まで入來して下さい。』

急き立てるやうに言つた。

『それは絶對に謝絶致します、この上貴方の保護でも受けやうものなら、それこそ疑ひが事實となつて、終生不貞不義の汚名を被なければならない事に成ります、ですから何と仰やつても、貴方の厚意を受ける事はならないです。』

『しかし深雪さん、貴女の軀は私が救けなかつたら、今頃は既に海底に沈んで、幽界の人になつて居らッしやるのでせう、して見れば復活なすつたも同じ事ですから、如何なる事をなすつたからと言つて、不貞不義と言はれる筈ないぢやありませんか、貴女の方では私の保護を受けると、保科家の疑ひを深くするから、絶對

に受けないと仰やるけれども、私の方から言ひますと、私故に離別の悲境に陥つて、死ぬ決心なすつた貴女を、幸にも自分の手で救ける事が出來たのですから、絶對的保護する義務と責任がありますから、強ても私の辭に從つて貰はなくちやならないです。生命までもと一身を賭して慕つて居る貴女を、何うしてこのまゝ放す事が出來得るものですか。』

飽くまで我意に從はしめようと主張する。

『何と仰やつても、お辭に從ふ事出來ませんから、私はこれで御免蒙ります。』

と立上つて別れやうとした、大村は慌だしくその手を執つて、

『それは免しません、貴女の軀は私が救けた以上、私の自由にします、強ひて反對なさるなら、止を得ないから警察へ同行して保護を願ふ事に致ませう。』

と威嚇した。

『何うして警察なぞへ保護をお願ひなさるんです。』

『自殺者を救助したのですから、私の意志に服從なさらん以上は、再び自殺する心配があるから、保護を頼むのです。』

『自殺致やうと致まいと、それは各自の自由意志で、他から干渉される筈はありません、貴方は自殺を救つて遣つたから、辭に從へと仰やるけれども、私は救はれて迷惑してゐます、厭世の結果決死したのですから、現世に未練は少しも無いんです。どうか干渉なさらないで、この手を放して下さい。』

『いゝえ、放しません、何うしても私の保護を受けないと仰やるなら、一緒に警察へ行きませう、さあ御同行なさい。』

『往けと仰やるなら同行致ますけれど、警察で投身の原因を述べ立たら、貴方が却てお困りなさりはしないですか。』

急所を衝いた深雪の辭に、有繋の大村も礑と弱つたが、弱味を見せては目的を遂行する事が出來ないと考へたから、平然として、

『私が困ると仰やるのは、何ういふ事を困ると仰やるんです、貴女に戀を容れよと談判した事ですか……述べ立てる精神ならお述べなさい、少しも困りは致ないです、私との關係を陳述なさると、寧ろ却て貴女の品性を疑はれますよ。』

と反對に威した。

『疑はれても管ひません、どうせもう不貞な行ひをしたと認められて、離緣されて了つたんですもの、貴方のために手籠にされかけた所を姑に認められて、それが爲に離緣された事が證據立てられるのでしたら、私却て身の潔白が證明されるんですから、どんなに滿足だか知れませんわ。』

『しかしです、私と會見するまでに成つた、その顚末を聞かれたら、何と答へるお心算です、潔白を證明するどころか、却て疑を深くするやうなものぢやありませんか。のみならず、貴女が私の罪を平然として陳述なさるなら、私だつて意氣地ですから、貴女とは以前東家へ食客して居つた際に、互に戀に落ちた結果、人

目の關を踰えて逢瀨を樂んで居つたのが露顯して、遂に放逐されたので、保科家へ嫁附かれてからも、時々密會して、以前の戀を續けてゐたと、誠しやかに陳述しますが、その時貴女は何と辯解致ます。』

『貴方は隨分な事仰やるわね……それでは痕方もない嘘僞を仰やる心算なんですか。』

『言ひたくはありませんが、貴女の陳述で私の一身が危くなれば、防衛上止を得ないぢやありませんか、それが厭なら私の意見にお任せなさるが宜いぢやありませんか。』

『幾度仰やつても、貴方の御意見に任せる事厭ですから、私此のまゝお別れ致します……』

把られた腕を振放して歩み出した。大村は慌てゝ、追縋ると共に、再び深雪の手を緊と握つた。

『飽まで私の親切を拒絶する御精神なら、私にも決心がありますから、否か應かの確答を聞かして下さい。』

否と答へたら、如何なる手段にも訴へかねない辭遣ひと決心とが見えた。爲に深雪は幾分かの恐怖と不安とを覺えたが、しかしそれも束の間に消えて了つた。死の覺悟の自分に何が怖ろしいものか、と斯う考へたからである。

『決心があるなら、甚麽御決心なりとなさるが宜い、私どうあつても貴方の御親切に從ふ事が出來ないんですから……』

と斷つて了つた。すると大村は忽ち辭遣から態度まで一變して、

『何うあつても私の意見に從はれないといふなら止を得ないから、私の決心通にするから覺悟するが宜い。』

言ふより早く緊と抱寄せた。深雪は吃驚して身を藻掻いて振放さうとしたが、大村の力に適する事は出來ないから、

『貴方私を何うするつもりなんです。』

と怒を含んで言つた。

『何も大聲出すには及ばない、私の自由にするのさ。』

『失敬な事仰やるな、貴方に自由にされる覺ありません。』

『覺があるも無いもあるものか、四年以來の希望を遂げるのだ。』

『えゝッ、それでは私を手籠にする意なんですね。』

『大きな聲をするない。』

『誰方か救けて下さい……』

絶叫した。大村は慌てゝ口を押へた。深雪は一生懸命に抵抗するのであつた。が、遂に力が足らず、その場へ倒された。その刹那大村の背後から横面を强か毆つて、右の利腕を逆に捻上げた人があつた。

晩秋の夜の海岸に、人が居ようなぞとは、夢にも思はなかつた大村は、好機逸すべ

からずと、寧ろ安心して慾望を遂げやうとしたが、意外にも利腕を逆に捻上げられたので、吃驚して深雪を放すと共に後を振返つた。見れば疎髯を蓄へた老紳士が烱たる眼を睜つて睨附けてゐたから、冷りと膽を刺されたものゝ、老人と知つたので忽ち勢付いて、

『何で亂暴するんだ、放せ……放さないと考へがあるぞ。』と脅かすやうに言つた。

老紳士は逆に捉へた手を少しも弛めず、

『亂暴とはお前の事ぢやないか、何故婦人に對して狼籍をする、汝が悔悟して、再びかゝる不埒を爲ないと誓ふなら放して遣らないものぢやないが、悔悟しなければ、放さないばかりか、その筋へ渡して了ふから、然う思ふが宜い。』

と靜かに諭した。深雪はと見れば、顏も得上げず、蹲つてゐた。

『決して亂暴は致ない、關係のある女の不實を責めて居るのだ、放せ貴樣などの干渉すべき問題ぢやない。』

言ひつゝ捉へられた腕を放さうと藻掻く、

『いくら藻掻いてもこの手は放れない、揚心流の柔術だ、藻掻くと腕骨が折れて了ふぞ、汝が何と辯解しても、私は先刻からの樣子を、殘らず聞いて知つて居る、悔悟して謝罪れば放して遣るが、さもなければ、その筋の手へ引渡して了ふぞ。』

柔道の心得があると聞いた大村は、初めの空威張は何處へやら、忽ち態度を改めて

『そりや詫れと仰やれば詫ります、どうかまあこの手を放して下さい。』

『謝罪するなら放して遣る。』

老紳士は漸く捉へた手を放した。この時深雪は面羞げに老紳士に向ひ、

『危い折柄をお救ひ下さいまして有難うございます。』

と淑かに禮を述べた。

『お禮には及ばないが、しかし私が救けた上はもう安心だ。』

言ふ顏を月の光に眺めた深雪は、

『おやッ貴方は瀧澤先生ではございませんか。』
呆れ顔して言つた、老紳士も吃驚して、
『然ういふ貴女は誰方です。』
と透すやうに眺めた。
『私は深雪でございます。』
『む……深雪さんでしたか……これは意外ぢや……成程然う聞けば、先刻から保科〻〻といふ辭が聞えたが、扨は貴女のお宅の事でしたか、委細の事は後で緩々伺ふとして、一体この男は何者です。』
『この人は以前私の家にゐた事のある、大村虎一といふ方です。』
『大村虎一……扨は博士の名義を僞つて、私に迷惑さした彼の大村ですな。』
二人が奇遇に駭いて話して居る隙を見計つた大村は、老紳士の瀧澤雪山と知れるが否や、飛鳥の如く逃出して、瞬く間に影を晦まして了つた。大村と聞いた雪山は逃

げる姿を眺めながら後を逐ひかけやうともせず、沈着拂つて、
『はゝゝ、舊惡が露顯致かけたものだから、居堪まらなくなつて、到頭逃げ出して了ひました、三歳兒の魂百までゝ、彼奴は未だに曲つた性根が直らないと見えますな、大村といふ事を早く知つたら、赦す奴ではないのでしたに、惜い事を致ました。しかし何うせその中に天の罰を受けますから、强ひて逐ふにも及びませんけれどもな、ところで先刻から聽いて居れば、何か彼奴が不埒を働いた爲に、貴女に禍が及ぼして、御離緣になつたとかで、身を投げにお入來に成つたところを彼奴がお救ひ申したやうなお話でしたが、一体まあ何ういふ事情から、然ういふ結果に成つたのです、定めて深い事情があるのでせうけれど、左に右私が承はつた上で、考へる所もありますから、私の宿まで御一緒にお入來下さい。』
『それでは、唯今の話を殘らずお聽下さいましたんですか。』
面羞さうに問ねた。

『いや、岩蔭へ隱れてゐて聽いたのですから詳しい樣子は解りかねましたが、概略は聞きました。實は先日來當地へ遊びに參つて居たのですが、文部省展覽會の審査が始まりますので、明日歸京致す筈になつて居るものですから、御承知の通り今日は近頃稀な好天氣で、殆ど春日のやうに暖かであつたものですから、名殘の散歩に出かけまして、謠を唸りながら、この海岸へ來ますると、微に人聲が致ますので、ハテな鎌倉は紳士紳商の別莊地だけあつて、十月になつても、私と同じやうに暢氣な人があると見える、これは拙な謠を聞かれて、物笑ひにされてはならないと斯う考へましたので、謠を止めて徐々と此方へ向けて來ましたところが益々話聲が聞えますから、ツイ好奇に聲を辿つて近寄りまして、彼れなる岩蔭に身を寄せて、聞くともなく聞いてゐると、身投しかけた方を救けた事が知れたものですから、若し結果に依つては、姿を現はして俱々お救け致さうと、尙も樣子を窺つて居ると、救けた人が知合の仲であつて、身投に就いても、重大の關係が

あるやうに知つたものですから、寧ろその意外に打たれて聞いて居ると、到頭暴力に訴へたものですから、今は猶豫すべき時でないと思つて、突如に飛出して、應援した次第ですが、それが計らずも、貴女と大村とでありましたのには、駭きました。しかしながら如何なる事情がありませうとも、死ぬといふ事は人間最大の不幸事でありますから、絶對に斷念なすつて、左に右私の宿に往つて、緩りと善後策を講じませう、及ばずながら盡せる限り御相談相手になります。』

『お聽になりました上は、最早隱すにも及びませんから、お辭に從ひまして何彼と御厄介をお願ひ申しますけれど、實は皆樣へお目にかゝる面目が無いものですから、悲觀の結果自殺致さうと考へまして、先刻先生と弟へ書面を差上げたやうな次第でございますが、ツイ大村のために妨げられまして、かゝる結果に立到りまして面目次第もございません。』

『承はるべき事も澤山ありますから、左に右私の宿まで御同行して、その上で御相談

致しませう。』

『とんだ御厄介を供へて相濟みませんでございます。』

二人は打連れて町の方へと歩み出した。月は高く清く澄み渡つて波浪の岸打つ音が婆娑々々と聞えるのに、路傍の露草の中からは、虫の音が斷續と聞えて、晩秋の夜の自然美が遺憾なく發揮されてゐたが、憂ひある深雪の身には、言ひ知れぬ悲哀を催さしめた。

やがて兩人は、雪の下なる、關屋正人と標札を掲げた家へ入つた。そうして雪山に導かれて、奥まつた客室へ通つた。關屋家の人々は、この意外な客に怪疑と不審とを起さずには居なれなかつた。

『まあ瀧澤樣は何うなすつたんでせう、この夜更けに若い婦人などお連れなすつて豈夫お妾さんが訪ねて來たのぢやないのでせうね。』

關屋夫人お辰が良人に向つて恁う言つた。

『だつて彼人が妾など置くやうな、那樣人ぢや無いぢやないか、散歩に出かけて連れて歸られたのだから、知合の人か何かに相違ない。』

『彼方だつて神樣ぢやなし、偶には若い女位相手になさるわ。』

かゝる想像に耽つてゐる折柄へ、雪山がのつそりと姿を現した。關屋夫婦は吃驚して口を噤んだ。

夜は更けて時計は十時半を告げた。

二七　善後策

雪山は關屋夫人に對つて、

『お辰さん、彼の婦人はね、東博士の娘さんで、保科といふ實業家の内へ嫁附いてゐる方だが、少し家庭に紛糾があつて私に相談に來られたのだから、御厄介だけれども、今夜一晩泊て上げて下さいな。』

と頼んだ。

『えい〳〵、汚ないのさへ御辛抱下されば、何時までなりとお泊め致ますわ。』

快よく答へた。すると正人が、

『すると、貴方のお宅に居る胖君の姉さんですか。』と問ねた。

『然うです、然うです。彼人の姉さんです、これから話を聞かなければならないのだから、遅くならうと思ひますで、床だけ敷べて置いて下されば、管はず先へ休んで下さい。』

『承知致しました。お次の六疊へ敷べさして置きますから、何時なりとお寢みなさるやうに仰やつて下さいまし、唯今お茶を差上げますが、何か召上る物差上げて宜しければ、直に然う言つて遣りますが如何でせうね。』

『別段御厄介願はなくても宜いでせう、しかし御婦人の事ですからお菓子を少しばかり願ひませうかね。』

『は、宜しうございます、唯今お茶と御一緒に差上げます。』

『どうか願ひます。』

頼んで置いて元の室へ歸つた。深雪は愁然と物思はしげに首垂れてゐた。が僅に顔を擡げて、

『先生、此方は旅館では無いやうにお見受致ますが、御懇意なお宅で居らッしやいますか。』

と問ひ試みた。

『この家ですか、此方は關屋正人と言ひまして、私の從弟に當る者です、以前海軍に奉職して居りましたが、日露戰爭の際に負傷したものですから、退職して當地に住居を定めましたので、茲五六年といふもの、秋になると年々遊びに來て、厄介に成つてゐます。伴がもう海軍大尉で、軍艦に乘つてゐるのですから、至つて氣樂に暮して居りますのに、家族が夫婦と下女ばかりですから、密談なぞするに

は至極安心です。唯今お泊めするやうに話して置きましたから、御遠慮なく、沈着いてお話なさいませ。』

『左樣でございますか、御親戚で居らッしやいますんですか、夜中伺ひまして、まだ御挨拶も致しませんで失禮して居りますが、とんだ御厄介かけて相濟みませんでございますね。』

『何有、夫婦共至つて洒落な人達ですから、少しも御遠慮には及びません、私から一寸御懇意な方が尋ねて入來しッたと、然う話して置きましたから、挨拶などは明朝で澤山です。』

『ですけれども、それでは餘りに無作法ですから、御挨拶だけ致したう存じますが如何でございませう。』

『私から能く話しますから、明朝になすつた方が宜いでせう、却て今夜は迷惑するかも知れません。』

『それでは御意に從ひまして、今夜は失禮致しませう…』

折柄二十歳前後の女中が、茶と菓子とを運んで來た。そうして深雪に一禮した後、

『お床を次へお敷べして置きましたから、お宜しい時お寢み遊ばして下さいまし。』

と告げた。

『とんだ御厄介をかけて相濟みませんわね、まだ御挨拶も致さないで失禮して居りますが、何れ明朝改めてお禮申上げますから、御主人樣へ宜しくお詫願ひます。』

『畏まりましてございます。』

と一禮して立去つた。雪山は聲を密めて、

『さあ、どうか離緣に就いての事情を詳しくお話し下さい。』

雪山の勸めに依つて、深雪は同じやうに聲を密めて、

『夜更けて御迷惑で居らッしやいませうけれど、どうか一通りお聽なすつて下さいまし。』

と、保科信行が病死後、姑お角の態度が、俄に一變して、些細な缺點まで意地惡く針を含んで追窮するやうになつた事、缺點を見出す事のならない節には、深雪の實家が絶家同樣な狀態になつて居るのを奇貨として、百も承知してゐながら、何彼につけて實家の事を問ねて苦しめる事、乳母に暇を出して、小供の媒育を深雪の手一つにせよと命じた事、甚しきは、お角が病氣の際に、揉療治を命じて、他の人々が疲れたのを見兼て、代つて揉むといふを飽まで斥けて代らせないために、腕の力が脱けて、遂には腫れ上るまで苛められた事、その時深雪の袂の中へ、密と金子の包を入れて置いて、床の下に入れ置いた金子が紛失したから、居合した人々の身体檢査をすると言ひ出して、一々檢めた結果、その金子が深雪の袂の中から現はれて、窃盗の汚名を被せられかけたを、小姑の夏子が見兼ねて、己の所業として救けて呉れた事など、姑お角の苛責が、日一日と慘酷を加へて、一時も安心して居られなくなつた結果、同情心に厚い小姑の勸めに依つて、脚氣病と僞つて、轉地療養を名と

して、鎌倉の別莊へ苛責の鋒鋩を避けた事まで、一伍一什を物語つた後、

『此方へ參りましてまだ一週間餘りにより成らないのですが、昨日の夕方でございました、少し買物がございました爲に、小兒を別莊番の妻に賴んで置いて、町まで參りまして、歸りかけますと、後から私の名を呼ぶ方がございますので、驚いて振返りますと、それが大村なんです。吁々可厭な人に見附けられたと思ひましたけれど、逃げ出す理にも參りかねまして、何か用向があるのかと問ねましたら是非話したい事があるから、長谷の三橋に泊つて居るから宿まで來て呉れと、まあ恁樣に申すのです、失禮な事をいふ男だとは思ひましたけれど、元來精神の良くない事を知つて居るものですから、惡感情を與へて、敵視されるも愚な事だと考へましたので、宿なぞへは往かれないから、話があるのなら、此處で聞くから話して呉れと申しましたら、往來中では話せないから、何處か散歩しながら話すから散歩して呉れと申すのです、その時もう黄昏ても居ります、小兒の事も案じ

られるものですから、斷然斷つて了ひましたら、聽きたくなければ、强てとは言はないけれど、貴女は近來某人から、非常に敵視されて、苛酷な待遇を受けてゐられる筈だが、その人は目下貴女の一身を處置するために、陰險な惡謀を企てつゝあるから、厚意上その企畫みつゝある惡謀を、お聽かせ爲やうと思つたのだが聽きたくないと仰やれば、强てとは申しませんと、恁樣に申すのです、それを私が耳を假さなければ宜しかつたのですけれど、姑の苛責が苦いのと、何が爲に辛くされるのであらうかと、その原因を知りたいと思つてゐた折柄ですから、浮とその餌に釣込まれまして、それなれば、夜中は困りますけれど、晝間お越し下さるなら、別莊でお目に懸りませうと約束した結果、今日の三時頃會見して、その話を聽く筈に成つたのでございます、ところが約束通三時頃參つたものですから他に聽かれてはならないと思ひまして、客室へ通して面會致ましたところが、姑の惡謀を知らして遣る代りに、自分が生家へ食客してゐる頃から、私に想ひを懸

けてゐるのだから、その戀を承容れて呉れと難題を言ひ出したのです、ですけれども餘りに侮辱の致しやうが烈しいから、私も辱しめて遣らうかとは思ひましたが、惡謀を聽きたいといふ弱點があるものですから、柳に風と物柔かに拒絶して了ひました。』

雪山は膝に兩手を正しく乘せたまゝ、熱心に耳を傾けてゐた。深雪は茶を啜つた後又語り續けた。

『するとその物柔かな態度を見まして、與し易いとでも誤解したと見えまして、尙も何の彼のと聽くに堪へないやうな事を申して居りましたが、何と言ひましても拒絶して了ふものですから、果は遂に亂暴にも、その場へ倒して手籠に致さうとしたのです。私もモウ容赦する時でないと思ひまして、その無禮を咎めると同時に、力限り抵抗致しました、その刹那に意外にも、閉切つてある襖が豁然と開いたものですから、吃驚して眺めると、何時の間に入來しつたものか、姑さんが怖

い眼附をして立つてゐられるのです、私は再び吃驚して、とんだ所を見られたと胸を痛めて居りますと、大村は物をも言はずに、その塲を去つて歸つて了つたのです、その跡で姑さんから姦夫を引入れて、密通したと責められましたけれども固より疚しい點など毛頭無いのですから、辭を極めて辯解致しましたが、現在を目擊したと仰やつて、何とお詫しても許して下さらないのみならず、今日限り離緣するから歸つて往けと宣告されたのでございます。けれども、御承知の通りの狀態で、歸つて往く家のない身の上ですから、種々と思案した末、生て居て後指を指されるよりは、寧そ一思ひに死んだ方が、總ての苦勞から脫れ得られると考へまして、到頭先刻のやうな結果に成りましたので、謂ば大村の爲に、死なねばならないやうな悲境に陷つて了つたのでございます。』

と離緣された顚末から、自殺を決心するに至つた事情を洩れなく物語つた。雪山は熱心に聽了つた後、

『いや、何も彼もお話に依つて能く解りました。しかし大村が姑さんの惡謀を何して知つて居るでせうか、それが不思議ぢやありませんか。』

『惡謀は何ういふ手續で知つたか、その點は分りかねますけれど、彼人は當時姑さんの實弟に當る、田浦久五郎といふ、土地家屋の周旋する方に使はれて居るさうですから、あゝいふ狡猾な男ですから、立聽でもしたのではないかと存じます。』

『へえ……彼男が姑さんの御親戚に使用されて居りますか……して姑さんが今日此地へお越しになる事は、前以て御通知が在つたのですか。』

『いゝえ、何の通知もなく、突然入來しッて、突如に襖を開けて姿を出されたので眞箇意外に驚きましてございます。』

『すると大村とのお話中に、室外にゐて談話を聽いてゐられたと見えますな。』

『屹度然うだと思ひます。』

雪山は寸時考へて居つたが、

『それは少し變ですね、局外の者が虛心平氣に聽くと、何だかその間に脚色された秘密の一幕があるやうに思はれますが、大村は金子でも貰つて、敵方の役者に使はれたのぢやありませんか、それでなくて、二人のお話中へ言ひ合したやうに來られやう道理が無いぢやありませんか。』

『私も何時の間に入來しつたか知らと不思議に堪へなかつたのですが、然う仰やられて見ますと、或は然うかも知れないでございますね。』

『まあ能く考へて御覽なさい、若し大村が貴女の一身を思ふて、惡謀を知らすのなら、姑に認められた場合に、その場を逃げ隱れせず、貴女のために潔白を證明する義務があるではありませんか、しかるに貴女の追窮されるのを承知しながら、姿を消して了つたといふのは、敵の惡謀を助けて貴女を離緣させる、所謂狂言と見る事が出來るではありませんか。』

と想像を述べた。

『眞箇左樣でございますね。』

深雪も雪山の意見に同意を表した。

『何故かなればです、貴女が保科家に居られる限りは、大村が如何に想を募らしても、絕對に希望を遂げる事は出來ないけれども、離緣されて獨身となられた上は公然と結婚する事を得る自由が得られる道理ですから、姑さんと相談の上で、脚色まれた狂言と想像すれば、爲る事は出來るぢやありませんか、殊にです、偶然と言へば偶然と言ひ得るけれども、今夜海岸で貴女の投身を、大村が救けたといふのも、邪推して見る日には、姑さんが貴女を離緣するのは、既定の約束になつて居るので、離緣後の貴女の一身を、親切盡で自由に致やうといふ、淺薄な考へから別莊附近に忍んでゐて、貴女の出られるのを待受けて居たところが、案の如くお出になつたから、機會を見て目的を果さうと、後を尾けたところが意外にも海岸へお出になつて、投身の樣子が知れたから、奇貨措くべからずとして、救け

たと觀る事も出來得るぢやありませんか、私は然う推定するのが適當ではないかと思ひます。』

と意見を述べた。

『成程然う承はつて見ますと、大村が海岸に居たといふのが最も疑ふべき點でございますわね、これは屹度御想像の通り、後を尾けたのかも知れませんね。』

『少し邪推に過るかは知れませんが、當らずと雖も遠からずだと思ひます、それは先づそれとして、當の問題は、離縁に對する善後策ですが、如何です、這回の離縁は、御主人は洋行中の事ですから、無論御承知ない事で、姑さんの專斷に相違無いと思ひますが、貴女に絶對に缺點が無いとは申しかねますけれど、貞操の潔白は、私が確く保證しますから、左に右謝罪して、復縁を願つて見る事に致しませうか。』

『復縁が願はれます事なら、可愛い小兒まである事ですから、どんなお詫びでも致

しますけれど、私を離縁なさる御決心で、大村を使嗾してまで御決行なすつたものとすれば、お願ひ下さるとしても、到底お聽容はあるまいと思ひますが、如何なものでございませうね』

『さあその點に就いては、私も懸念しないではありませんが、しかしですね、設令拒絶されるまでも、一應は順序として復縁を交渉するのが、當然のやうに考へますから、左に右私が保科家へ往つて御相談致しませう。』

『實は保科も豫定を變更致しまして、十一月彼地を出發して歸朝する筈になつて居りますから、遲くも十二月に歸京する事と考へてゐますから、復縁が願はれますなら、這麼幸福な事無いのですから、御厄介でございませうけれど、何分にも宜しくお願ひ申します。』

『然う致しますと、明日か明後日私が交渉に出向きますから、貴女は明朝私と一緒に歸京なすつて、不自由でせうけれども當分私の家に遊んで居らッしやいませ。』

『弟が御厄介を願つて居ります上に私まで御厄介に預つては、申譯がございませんけれど、斯樣な場合でございますから御厄介でございませうけれど、暫時お世話をお願ひ申します。』

『御承知の通り、私と胖君と二人限で後は女中が居るだけですから、何の御遠慮もありませんから、御生家と申しては失禮ですけれど、お生家の意で、いつまでなりと居らッしやるが宜いです。』

『有難う存じます、父が歿しまして以來といふもの、先生には一方ならない御厄介に預つて居りますけれど、胖が世に立つやうに成りましたら、倶々御恩返し致しますから、この上ながら宜しくお願ひ申します。』

雪山は茶を啜りながら、

『何有貴女御恩返しなぞと、那樣御心配があるものですか、貴女や胖君に盡す事が出來るのは、私が何より望むところで、博士より受けた御恩の萬分一に酬ゆるの

です、私が今日日本の美術家として、恐れ多くも帝室へまで召出されるやうに成りましたのは、皆な博士の賜物です、若し博士のやうな知己を得なかつたら、終生を不遇に送らなければならなかつたのです、その御高恩を思へば、貴女方に微力を添へる事が出來るのは、私の最も本懷に思ふところです、ですからお心措なく自分の生家だと思つて何時までなりと遊んで居られるが宜いです。』

『有難う存じます、私共姉弟は、御承知の通り、親戚とてもない、誠に便り少い身の上ですから、今日では眞箇先生を杖とも柱とも存じて居りますから、厄介の小兒を持つたと思召しまして、幾重にも宜しくお願ひ致します。』

『恁う事が決した上は、唯今もお話した如く、私は文展の審査がある爲に、明朝歸京する筈になつて居りますから、御一緒に歸る事に致しませう。』

『何分にも宜しくお願ひ致します。』

『それでは、今夜は御疲勞も出てゐるでせうから、お寢みなさいませ。』

『有難う存じます、恁樣な御心配を掛けないやうにと存じまして、一身の處置を決心したのでございますが、それが計らずも御厄介を供へるやうに成りまして、眞箇相濟まないでございます。』

『しかし大村の不德は責むべき奴ですが、彼が貴女の一身を救けたといふ事は感謝爲なければならないです、若しあの塲合、大村が居なければ、貴女のお身は何う成り果てゝ居るか知れないですからね、はゝゝは。』

と輕く笑つて、

『それから事の序だからお話して置きますが、胖君が貴女から奬勵的の書面が來た爲に、一日も早く東家の再興が計りたいと思ふが、それには是非とも美術家として一家を成さなければならないから、何でも彼でも本年の文展へ何か出品したいと、熱心に希望するものですから、私もその熱心に動かされて、八曲屏風を當がつて當人の隨意に描せる事に爲たのです。』

『まあ、那樣御無理をお願ひ申しましてございますかね。』

『實は天才的の手腕を持つてゐるのですから、今日までもなく出品させて遣りたかつたのですけれど、御承知の通り、まだ漸く十七歳ですから、慢心なぞ起さしてはならないと、前途を氣遣つて許さなかつたのですけれど、斷じて慢心など起さないと誓つた上で、許して見たのですが、その繪が非常な出來榮で、いつの間にあれだけの手腕に成つたかと、朝夕一緒に居る私が駭くほどの傑作が出來上りましたので、まだ當人へは何にも言はないで居りますが、確に本年の文展に美術家をして嘆賞させる傑作の一つに計へらるゝ事と信じて居ります。ですから玆數年を撓まず研究に一心を注いだら、東家の再興は期して待つべきだと思ひますから私も世話効があつたのを、心密に歡んで居ります。』

『まあ左樣でございますか、實は餘りに姑から生家の零落を輕蔑されるものですから、一生懸命に勉强して、一日も早く東家の再興を計つて呉れるやうにと、書面

を遣はしましたところが、先生に願つて本年の文展へ何か描て出す事になつたから欣んで呉れと返書を寄來しましたけれど、到底物には成らない事と存じて居りましたが、お賞めに預るやうな物が出來ましたのは、偏に先生御苦心の賜物でございます。天にも地にも便りとするものは彼人一人でございますから、この上ながら宜しく御薫陶のほど、只管お願ひ申し上げます。』

二八　驚愕

午前七時頃の事であつた。胖は朝飯を喫し了つて、學校に往くべく準備しつゝあるところへ、在鎌倉の姉から出した書面が、自分ばかりでなく、師たる雪山へ宛てたものと二通配達された。

『文展への出品畫が、旨く入選したら書面を出さうと思つてゐたら、彼方から先へ寄來されたが、屹度一生懸命に描けといふ奬勵だらう……』

言ひつゝ封を披いて讀み初めた。

涙ながらに一筆書遺し參らせ候、私事豫て姑様より苛酷の待遇を受け居り候結果、幽吉様の歸朝まで、その迫害を避けるため、同情厚き夏子様と相談の上、脚氣病と僞り當別莊へ參り、淋しく暮し居り候ところ、今日斗らざる事より、以前我家に寄食致し候大村訪ね參り、會見の必要相起り候ため、一室に通し會談致し居り候ところ、姑お角様突然お入來に相成り、大村と道ならぬ不義を働き候やう跡方もなき難題を言ひ出され候につき、懇々辯解に相力め候へども、頑としお聽容なきのみならず、斷然離別の宣告をなされ、文子を伴ひ御歸京なされ候間、悲嘆の餘り現世が怨めしく相成候につき、生きて耻辱を世間に曝すよりは、死して身の潔白を證明致したく、今宵八時頃の滿潮を期し、海中に身を投じ、現世の苦艱を解脱致し候間、何事も定まる運命と御諦め下され候て、御前様は瀧澤先生に縋り、必ず東家の再興御計り下されたく、呉々もお願ひ申上げ候。死別に臨みお

願ひ申たきは、幽吉様歸朝の上は、是非御面會下され候て、身の潔白を御告げ下されたく、これのみ願上げ申候。

尙此度の事に就いては、必ず何人をもお怨みなさるまじく、かくなる運命に生れ合せたものと御諦めなされ度候。私の荷物は先生へ御相談なされ候て、御引取下されたく願上げ候。

胖　殿

深　雪

讀み了つた時は、狂氣の如く駭いて、忽ち悲嘆の涙をはら〳〵と零した。

『いくら騷いだところが、昨夕の今朝だから到底救ける方法はあるまいけれども、幸ひ先生も彼地に居られる事だしするから、これから直に出かけて死骸を捜索した上で、せめて最期の名殘を惜む事に仕やう、吁々殘念な事をしたね……死なずとも方法はあつたであらうのに……何うして我々姉弟は恁ういふ不幸に生れ合せ

たか知ら……。』

涙ながらに立上つて、匆々準備して品川から列車に乘つて出發した。が途すがらもお角の無情を怨むと共に、大村の不德を怨まずには居られなかつた。

『姉さんは大村の性行を能く知つて居て、近づける奴でないと言ひながら、何うして面會なぞしたのか知ら……第一不審なのは、大村が姉さんの鎌倉へ往つてる事を知つて居る事だが、誰から聞いたのか知ら……實に不可思議千萬だ……それに又お角さんが突然往つて、その場へ現れたといふのも、不審を起さずには居られない……しかし設令姉さんに、如何なる缺點があつたにしても、主人公たる兄様の不在中に、勝手に離緣して了ふといふは、彌以て怪しからない話だ、大村の奴も惡いが、お角さんも不都合だ、姉さんは他を怨むな、運命と諦めよと書いて居られるけれども、自殺の原因が彼等兩人にある以上、何うして怨まずに居られるものか、今に復讐するから覺えて居るが宜い。』

『しかし滿潮時を期して云々と記してあるから、到底救かるやうな事あるまいけれど、萬が一通りかゝつた漁船でもあつて、救けられて居ると、那樣欣ばしい事ないが、それは到底絶望に了るだらうね……』

恁ういふ事を、それからそれと考へ續けて居る中に、汽車は早くも鎌倉停車場へ着いた。時は九時半を少し過た時であつた。

胖は列車を降りるが否や、檢札口を出て俥のある方へ、すた〳〵と歩み出した。すると背後から、

『東さん、東さん……』

と續け樣に呼ぶ聲が聞えた。胖は吃驚して振返つた。見れば保科夏子が、檢札口の方から歩んで來るのが目に着いた。胖は何か手がゝりが得られはせぬかと、立停つて待受けた。例も愛嬌の宜い夏子の顏が氣の故か沈んでゐるやうに見えた。

『能く似た方だと思つて、聲をかけて見ましたのよ、唯今の列車で入來しッて？』

夏子が近づき樣恁う言つた。

『は、唯今の列車で參りましたが、貴女は？』

『私も唯今ので參りましたのよ。』

『では、同じ列車に乘つて居たのですね』

『は、然うなんですよ、知らないといふものは、莫迦々々しいものですわね。』

『眞箇ですね、新橋からお乘りなすつて？』

『いゝえ、品川から乘りました。』

『だから知れなかつたのですわ。』

『貴女新橋からでしたか。』

『は、品川へ出やうかと思ひましたけれど、ッイ新橋から乘りましたわ、道理で姿が見えなかつた筈ですわ、貴方乾度お姉樣の事で入來ッたんでせうね。』

と問ひかけたが、その聲は顫へて居た。

『貴女それを何うして御存じです。』

『今朝お姉様からの遺書が届いたものですから、吃驚して參つたのです。』

『僕も姉の書面を見て駭いて參りましたが、しかし書面の様子から考へると、到底哀しい姿を見る外はあるまいと思ひます。』涙を泛べた。

『私も汽車の中で、種々と想像して見たのですけれど、あのお書面から考へますともう到底間に合はないと思ひましたが、しかし萬に一つも誰かに救けられて居らッしやるとか、決心を變へて無事で居らッしやるやうな事はないか知らと、恃み難い事を恃みにして出かけては參りましたけれど、萬一……御短慮をお出しなつた後なら、私何うしたら宜いか知らと、涙ばかり出ますのよ。』

とハンケチを目に當てる。

『僕も貴女と同じ希望を抱いて出かけて參りましたが、恐く絶望に了るであらうと思ひます、何しろ滿潮時を期して決行すると言ふのですからね。』

『それで貴方何ういふ方針をお採りなさる考へです。』

『幸ひ此方の御親戚へ、僕の先生が來て居られますから、先生に御相談して搜索の方法を定めようと思つて居ます。』

『左樣ですか、それは何より好い御都合ですね、すると私は左に右宅の別莊へ參りまして、何彼の樣子を問いて見る事に致ますから、御相談が極りましたら、一寸お知らせ下さいませんか。』

『承知致しました、扇ヶ谷の保科の別莊で分りますね。』

『は、それで直と分りますわ、貴方往らつしやるのは、何方樣です。』

『僕の往くのは、雪の下の關屋正人といふ家です。』

『それでは、お別れして後刻又お目にかゝりますわ。』

と兩人は俥を命じて、互に志す方へと急がした。途すがら夏子は斯う思つた。若し深雪が保科家から離緣されて、それがために自殺したとなれば、保科家は東家の

敵となつて、兩家の關係は永遠に絶える事になるが、然うなる時は自分が胖に對する希望も達する事が出來ないから、この際胖の感情を和らげるためには、盡せるだけ盡して、繼母の苛酷を償はなければならないと……胖は又斯う思ふた。深雪の書面にもあつた如く、お角こそ苛酷な扱を極めたが、幽吉や夏子は離緣に關係がないのみならず、多大の同情を持つて居ると……

二九　悲喜

雪の下の關屋家に、師の雪山を訪ふた胖は、關屋夫婦とも知合の間柄とて、直に辰夫人に導かれて、雪山の居る客室へ入つた。

『先生、胖さんがお越しに成りました。』

と夫人が告げて去つた。

『おゝ心配して來たのぢやらうな……』

雪山が恁う言つて迎へた。

『今朝姉から書面が參りまして、披いて見ますと海岸へ身を投げて死ぬといふ遺書でありましたので、喫驚して參りましたが、昨晩死ぬといふ通知ですから、もう今日となつては、救ける方法はありませんけれど、先生へ御相談した上で、せめて死骸なりと搜索したいと考へまして、御相談に上りました、先生へも書面を寄來しましたから、持參致してございます。』

と落涙しながら書面を渡した。

『それは定めて心配もし、落膽も致たぢやらうな、然う思ふたから唯今電報を打ちに往つとるところだが、安心するが宜い、姉さんの一命は幸に救けられて、昨夕は此家へ泊めて、これから私と一緒に歸る筈になつてるのぢや。』

『えゝッ、先生それは眞箇の事でございませうか。』

覺えず膝を進めた。ところへ女中と共に電信局へ往つた深雪が歸つて來た、それと

見た胖は夢かとばかり喜んで、

『お丶姉さん……』

『お丶胖さん……』

駈け寄つて、寸時無言のまゝ、手を取合つて泣くのであつた。姉弟の心情を察した雪山も暗涙を拂つてゐた。や丶寸時經て、深雪は涙を袖に拭ひつゝ、

『……心配させて濟まなかつたわね、堪忍して頂戴よ……屹度書面を見て出かけて入來しやるかも知れないと思つたものだから、先生へ御相談して、唯今電報を打つて來たところだけれども、もう間に合はなかつたわね、どんなにか駭いて心配したでせうね。』

と又落涙した。

『昨夕の今朝ですから、到底もう救ける方法は無いと思ひましたが、せめて死骸なりと搜索致やうと思つて、先生へ御相談に來ました、無事のお顏を見たら、嬉し

いやら悲しいやらで、夢のやうな氣持がしますが、一体何うして死ぬなんといふ思ひ詰めた決心をなさるんです、いくら離緣されたからと言つて、死な無くッても宜いぢやありませんか、姉さんは死んで潔白を證據立てる精神でせうが、死んで了へば却て疑ひを深くするやうなものです、身の言譯が立たないから死んだのだと思はれても、止を得ないぢやありませんか、姉さんが道ならない事をするやうな方でない事は、誰よりも弟の僕が知つてゐます。姉さんは屹度お角さんや大村に謀られたんです、彼人達が何か爲にする事があつて、貴姉を陷れたに相違無いです。僕…僕が今に世に立つたら、屹度復讐して遣りますから、殘念でせうけれどもどうか辛抱してゐて下さい。』

熱涙を流しながら慰めた。

『書面に認めたやうな事情で離緣されたものですから、もう〳〵世の中が厭になつて了つたので、それで思ひ詰めた氣を出したけれども、思ひ依らず救けられて、

先生の御厄介に預る事になりましたのよ。』
この時まで悄然として、姉弟の話を聞いてゐた雪山は、
『私がこの家へお連れ申したに就いても、種々仔細があるけれども、それは緩々話すとして、私は文展の審査を控へて居るから、何でも彼でも歸らなければならないが、左に右一緒に歸らうではないか。』
『はい、御一緒にお供を致します。』
ところへ女中が入つて來て、
『東様をお訪ねになつて、保科夏子様と仰やる方がお越なさいましてございます。』
『然う〳〵まだお話する事忘れてゐましたが、夏子さんが姉様からの書面に驚いて僕と同じ列車で入來しッたんですよ、列車の中では少しも分らなかつたんですが降りてから聲をかけられて始めて知りました、取敢ず別莊へ往つて、様子を見ると仰やつて、別莊へ往かれたのですけれど、様子が知れないので尋ねて入來しつ

たんでせう。』
と胖が告げた。
『まあ夏子さんが……それはお氣の毒したわね、では私が迎へに出るわ。』
と深雪は自ら玄關頭へ出た。その姿を見た夏子は吃驚して、
『まあ……』
言つた限り後の辭は續かなかつた。
『左に右上つて頂戴、委細の話は彼方で致ますわ。』
夏子は言はるゝ儘、無我夢中に伴はれて客室へ通つた。そうして胖に紹介されて、雪山へ挨拶した後、
『まあお姉様、能く御無事でゐて下すつたわね、私お書面を拜見して、もう迎も現世ではお目に懸れないけれど、せめてお姿でも見て、お別れ致やうと取物も取敢ず參りましてよ、餘り嬉しくッて涙が零れますわ。』

と泣くのであつた。

『とんだ御心配かけて申譯がありませんね……面目無くて生てる空はないものですから、死んで身の潔白を立てやうと決心して、既に實行するところを、思はない人に妨げられて、到頭瀧澤先生のお救けに預かつたんですわ、御心配かけて相濟まなかつたけれど堪忍して頂戴ね。』

深雪も涙ながら詫びた。

『いくら心配したつて、哀しいお姿見なければならないやうでは、心配の致効が無いけれども、御無事のお顏を見て、こんな歡ばしい事ありませんわ、お姉樣のお身の上に萬一の事でもあらうものなら、私兄樣へ申譯が無いのですもの……どうか甚麼苦痛がありましても、兄樣が歸つて入來ッしやるまでは必ず短氣を出して下すつちや厭よ、私吳々も願つて置くわ。』

『貴女の御親切は身に沁々と嬉しく思ひますけれど、私もう保科家の人では無いん

ですもの、兄樣が御歸朝なすつても、致方無いぢやありませんか。』

言ふを夏子が遮るやうに、

『ですけれども、離緣は意地惡の母樣が獨斷でなすつた事で、兄樣は夢にも御存じない事ぢやありませんか、兄樣も私と同じやうに姉樣を信じて居らッしやるんですもの、何うして品性をお疑ひなさるものですか、圓滿な家庭に恢復するのは知れ切つた事ですもの、寸時自重して待つて丶頂戴な。』

『然ういふ嬉しい境遇になれるものなら、甚麼苦痛でも忍びますけれど、お母樣がお許しにならないんですから、それは到底徒目だと思ひますわ。』

『何うして徒目なものですか、若し母樣が故障仰やつて兄樣の心が動くやうでしたら、その時は私が全力を盡して兄樣を說きますから、左に右兄樣が歸つて入來しやるまで、苦しくとも辛抱してゐて頂戴な。』

言ふ時十一時の時計が鳴つたので、歸京を急いでゐる雪山が、

『私は何でも彼でも歸京致なきやならないから、これから直に出發致ますが貴女方は何うなさる、お話がお在りなさるなら、緩りと話してお歸りなさるとも、御一緒にお歸りなさるとも、御都合の好いやうになさい。』

一同に向つて言つた。

『私共の話は何時でも出來る話ですから、御一緒にお供致します、お急ぎで居らッしやいますのにお待たせ申して相濟まないでございました。』と深雪が挨拶した。

そうして一同は關屋家へ厚く禮を述べた後、歸京の途に就いた。

三〇 後難

京橋區南傳馬町なる山浦久五郎方の二階の一室で、密談に耽つて居るは、主人山浦と、大村虎一と、保科未亡人お角の三人であつた。彼等は深雪離縁の實行を了へて今後を相談すべく會見したのである。

『這度の一件に就いては、眞箇大村さんに一方ならないお骨折をかけましたわね。それが爲に豫定通り、總てが旨く運びましたけれど、その後の樣子が聞きたいと思つて、それで出かけて參りましたわ、あれから何うなさいました、貴方の事ですから屹度成功なすつたでせうね。』

お角が先づ恁う問ひかけた。これまでいつの會合にも、意氣天を衝くの勢を示した大村は、不思議なまで銷沈した態度で、

『成功するどころの話ではありません、實は昨晩生命辛々逃げ出して歸つて來ましたから、今朝は山浦さんなり、貴女なりへ御相談して、私の身の御保護を願はうと思つてゐた折柄です。』

と告げた。この辭にはお角は固より山浦も意外に感じて、

『それは又何ういふ理由です？』

と、殆ど異口同音に問ひかけた。

『いや、お話にならない大失敗を演じたのです、まあ掻摘んでお話しますから聽いて下さい。』

と、お角と別れた後、直に別莊附近まで駈附けて、深雪の動靜を窺つた事、深雪が別莊を出かけたので、密かに後を尾けた事、すると意外にも海岸へ往つて、投身を計りかけたから、抱留めて救助した事、懇々と決死の不條理を說いて己の辭に從はせやうとした事、深雪の頑として應じないために、暴力に訴へて從はせやうとした事、その時思ひがけなく、瀧澤雪山が現れて、そを妨げたのみならず、柔道の秘術をもつて强か懲しめられた事、危く捕へられるところを隙を視て逃出した事まで、委細物語つた後、

『逃げ出すには逃げ出したものゝ、私が三橋に泊つてる事は、深雪が知つてるものですから、若や瀧澤の入智慧で警察へでも訴へられやうものなら、設令罪にならないまでも、一應は拘引されて、事實の取調を受けなければならないと考へまし

たから、早速宿に歸つて、急用が出來したからと言つて、昨晩十二時何分の列車で慌てゝ歸京致ました。就いてはです、何れこの事に就いてはこの儘には捨置かないに相違ないと思ひますから、私は當分會社の方のお暇を願つて、身を隱さなければならないです、と言ふのは、瀧澤と私とは以前繪の事に就いて、爭論した事がありまして、殆ど敵同士のやうになつた限り今日に至つたのです、ですから昨夜の事件を幸ひに、奇貨措くべからずとして、屹度私の罪を問責するために、深雪を教唆してその筋へ告訴させるに相違無いです。だから轉ばぬ先の杖で暫時身を隱して難を避けやうと思ふです。』

と告げた。お角も山浦も吃驚して、

『それはまあ大變な事に成りましたね、すると深雪は離緣されたのが耻かしくて、投身して死ぬ量見だつたのですね……十分教育を受けてるから、那樣思ひ詰めた事は致ないであらうと思ひましたが、思ひの外氣の小さい女ですね……私は貴方

の手腕を拜見して、感心させられたものですから、屹度成功疑ひ無しだと、今の今まで安心してゐましたのよ、しかしとんだ手違になつてお氣の毒致たわね。』

お角が氣の毒さうに言つた。

『困つた事に成つたね、今日の塲合君に會社を出られては、眞箇遣り切れないがね……と言つて、然ういふ災難が出來した以上、安閑としてゐる理にも行くまいが何とか好い考案はないものか知ら……。』

と山浦が言つた。ところへ娘のお鶴が慌だしく上つて來た。

『ちよいと大村さん、警視廳の刑事が貴方に問ねたい事があると言つて來ましたのよ。』

と、他聞を憚るやうに告げた。大村は忽ち顏色を變へて、

『それで何と言つて下さつた？』

『唯今居らッしやらないと言ひましたら、然うかと言つて、歸つて往きましたが、

嘘でも吐くと思つたのか、奥の方を覗くやうに眺めたり、外に出かけてからも二階を見上げて居ましたのよ。』

『さては愈告訴したと見えるね……どうも有難う、どうか誰が問ねて來ても、此方には居ないと仰やつて下さい。』

『承知致ました、私餘程居らッしやると言はうか知らと思ひましたが、刑事なぞ好い事で來る筈ないと思つて、不在だと言ひましたが、丁度好かつたんですね。』

言ひ了つて下へ降りて往つた。

『他の事で刑事などが來る筈無いんですから、強姦未遂の告訴でも起したんでせう告訴したと極つて見れば、一刻も猶豫ならないから、これから直に身を隱さなければならないですが、東京にまご〳〵してゐた日には、直に見附かつて了ひますから、少し熱度の冷めるまで、氣の附かない片田舎へ往かうと考へますから、旅費を貸して頂きたいと思ひますが如何でせうね。』

と兩人の顏を見た。お角は山浦の意見を知りたげに、無言のまゝ山浦の顏を眺めた

『外の塲合と違ふから、旅費位は何とか致なきやならないが何程ばかり入用かね。』

と大村の答へを促した。

『先日頂いた金子をツイ莫迦遊びに使つて了つたものですから、もう懷中には十四五圓より殘つてゐないのです、ですから誠にお氣の毒ですけれど、どうか三本ばかり御都合が願ひたいものです。』

『三本とは三十圓の事かね。』

『いゝえ三百圓の事です。』

『えゝッ三百圓!?』

と驚きの眼を睜つてお角を見ながら、

『ね、姉さん三百圓欲いさうですが、御都合は如何でせう。』

斷れと言はぬばかりの口態で問ねた。それと覺つたお角は、

『三百圓なんて迚も今が今と言つて都合が就かないわ、五十圓ばかりで御辛抱が願へないでせうかね。』

『大村君何うだらうね、その位で何とか我慢出來ないだらうかね。』

『本來なら五百圓ばかり拜借して、滿洲へでも往きたいのですが、お氣の毒だと思つて、北海道へでも飛ぶ意なんです、五十や百の端金が在つたところが、一ケ月と凌がれるものぢやありませんから、那樣客な事を言はないで、清く三百圓貸して下さいな、貴下方の犧牲にさへならなければ、住馴れた東京に、平氣で居られる軀を、五尺の軀の置どころのない境遇になつて、往先定めない旅の空へ出るのぢやありませんか、それも出來ない相談を持出した理でなく、何うでも都合の出來る御身分で居らッしやるんだから、その位な賴みは聽容れて下すつても宜いぢやありませんか。』

『それでは二百圓だけ何とか都合致ますから、それで御辛抱下さいな。』

とお角が言つた。

『それほど御迷惑なら、すッかりとお斷り致します、何も拘引されたからと言つて私一人が罪人になる理ぢやないんですからね、逃隱れせずに平氣で東京に居りませう、東京にさへ居れば別段金子の無心を言はなくても居られるんですからね。』

厭味交りに斷つた。

『姉さん、何とか都合して下さいな、考へて見れば、大村君も我々の犧牲になつて居るのですからね。』

と山浦が弱音を吐いた。

瓶持つ身のお角は、大村に總ての秘密を握られて居る悲しさに、山浦の意見を容れて、

『それでは何とか都合致しませう、しかし唯今と申しては持合して居ませんから、これから歸つて、午後の三時までに此方へ屆ける事に致ますから、それまでお待

を願ひます。』

と遂に大村の要求を容れた。

『すると私は旅行の準備致ますから、これで失敬致ますが、四時前後に密と此方へ伺ひますから、それまでに間違なくお願ひ致します。』

『は、必ず屆けて置きますから、然ういふ事にお願ひ致します。』

『それではこれでお別れ致ますが、暫時お目に懸りませんから、折角目的の御成功を祈ります。』と挨拶した。

『貴方もどうかお軀を大切になすつて熱度が冷めたら、成るたけ早くお歸りなさいまし。』とお角も挨拶した。そうして大村は山浦と後刻を約して立去つた。後で兩人は顏見合して、

『彼の人に骨は折らせたものゝ、とんだ請求をされて厭になつて了つた。惡事を引受ける位な人間だから、彼位な事は當然か知れないけれど、隨分な人間だね。』

とお角が愚痴を零した。

『しかし考へて見れば、氣の毒です、深雪を手に入れる心算で引受けたのが、すッかり豫想が外れた上に、刑事問題が起つたと言ふのですからね、萬一大村が拘引されでゝして、事實を自白されやうものなら、今日までの苦心が皆な水の泡になつて了ふばかりでなく、貴姉にしても私にしても、安閑としては居られないですからね、本來なら彼方から請求するまでもなく、此方から相當な旅費を與つて、逃がさなければならない位なものですから、あの位な金子は惡事の稅金と思つて諦めなきやならないです。』

と慰めるやうに言つた。

『まあ然うでも思つて諦めるんだね……ところで深雪の方ですがね、情夫を引入れて密通したといふ口實にして、否應なしに離緣の宣告して了ひましたが、後の始末は何うしたものでせう、實はその相談に來たんです。』

『跡仕末と言ひますのは？』

『軀だけは離緣したけれども、戸籍を送つて了はなければ、全然無關係とは言はれないでせう、若しこの儘にして置くと、その中に幽吉が歸つて來ると、何を言ひ出すか知れないから、直に送籍の手續をして了つて、何も彼も綺麗すッかりと片が附けて置きたいと思ふのです。』

『それは無論です、戸籍を送つて了はなければ、離緣したにならないですからね、今日にも實行するが宜いでせう。』

『だけれども、私には戸籍上の事など解らないから、お前さん運んで片を附けて下さいな。』

『私も戸籍法の事なぞ、詳しく知らないから知合の辯護士に賴んで運んで貰ひましやう、深雪の實家が潰れて無くなつて居るのに、夫の幽吉が不在中と來てるから、思ひの外手續が難かしいかも知れません……』

『私も然う思つてるのですよ、加之第一當人の居所が知れませんでは。離縁屆に捺印さす事が出來ないと思つて、それを心配して居ましたが、大村の話に依つて、弟の胖が厄介になつてる、瀧澤といふ畫家に救けられた事が分つたから、それだけは漸と安心致ました。すると早速頼んで運んで貰つて下さい、それでなくちや極が附かなくて困りますからね。』

『承知致ました、早速依頼して運ばせます。』

『それから幽吉へは、電報で知らして置いて、後から詳しい書面を遣らうと思ひますが如何でせうね。』

『それは至極宜いでせう、何しろ重大な事件ですから、本來なら一應電報をもつて幽吉の意見を聞合せた上で實行すべき筈のものですからね、離縁して置きながら悠々と書面で通知する理には行かないから、要領だけ記して電報を打つて置いて直に委細を認めた書面を出すが宜いです。』

と山浦が同意を表した。

『しかし、深雪も幽吉には十分思召があるんだから、屹度自分勝手な理窟を附けて辯解の書面を出すに相違無いと思ひますが、幽吉が又深雪でなくちや夜も日も明けないと來てゐるのだから、深雪の辯解に迷はされて、何とか故障を言つて寄越しは致ないかと、それを心配するんだよ。』

『それは何とも保障が出來かねますね、聞くところに依ると、戀女房ださうですからね。しかし戸籍まで送り返して了へば、もう何と言つても此方の勝利ですから復縁させると言へば、絶對に妨害して爲せないだけの事ですよ、設令又幽吉が歸すから歸れと言ふにしても、豈夫貴姉が保科家に居らッしやる限りは、いくら鐵面皮だつて、深雪が得歸つて來ないですよ。』

『それは私も然う思ひますのよ、何にしても抱附いて居るところへ、ヌッと私が入つてその場で宣告して了つたのですから、私の前では嘘と言ひ脱ける事出來ない

からね。』

『深雪の方は、離縁して了つた上は、少しも心配致ませんが、心配なのは大村です よ、萬一先方の告訴に依つて、拘引でもされやうものなら、どんな事から我々の秘密を自白致ないとも限らないが、自白されやうものなら、それこそ大變で、何も彼も露顯するのみならず、共々拘引されて、赭い仕着を被なければならないですからね。』

と不安さうに言つた。

『だけれども、彼男の事だから、萬一拘引されたにしても、何とか罪を言ひ脱けるであらうし、設令又止むを得なくて、罪に問はれるやうな事があるとしても、自分が彼女に思ひをかけて居た爲に、その望みを遂げやうとして行つた事だと、自分一人の罪にして豈夫我々の秘密まで自白する事ないと思ふが、何う考へます。』

『自白さへ致なければ、何より結構ですが、その代り放免されて出て來た曉は、秘

密を材料に、金子の無心に屹度來ますが、それが思ひ遣られます、借さなければあゝ言ふ男だから、破れかぶれで何を致出來すか知れたものぢやありませんから何程か宛でも貸して遣らなきやならないですが、其が際限の無い話ですからね。』

『豈夫そんな惡い人でもないでせうよ。』

『ですけれども、先刻の態度を見ると遣りかねないと思ひます、秘密を握つてゐるぞと言はないばかりの遣口が、顯然と見えて居るのですからね。』

『そんなに際限なく請求されては、眞箇困つて了ひますね、折角深雪の方をお前さんの望み通りに離縁したと思へば、直にこんな心配が湧いて來るんだもの、嫌になつて了ふね、しかし那樣先の先まで心配してゐた日には、到底も希望を遂げる事は出來ないから、それはその時に臨機の方法を取らうではありませんか。』

『それも然うですね、今更悔んで見たところが、もう實行した後の事ですからね、それではお氣の毒ですけれど、どうか三百圓だけ、三時までに届けて下さい、こ

の際は成るたけ遠方へ逃がした方が安心ですからね。』

『承知致ました、歸つて直に持たせて寄來ますが、どうか送籍の手續を賴みますよ。』

『その方は私が責任をもつて引受けますから、御安心を願ひますが、幽吉の方への電報や書面を、成たけ早く出して下さい。』

『それも歸ると早速運びます。』やがて別れを告げて歸つて往つた。

三一　赤誠

鎌倉の關屋家を去つて、歸京の途に就いた雪山等一行四人は、午後二時過に麻布新堀町の瀧澤家へ着いた。雪山は歸るが否や、早々旅裝を改めて、文部省の繪畫展覽會場へと俥を飛ばした。後に殘つた深雪、胖、夏子の三人は、胖の部屋に集つて、前途の方針に就いて、互に相談するのであつた。

『瀧澤先生が居らしッたから、列車の中では默つて控へてゐましたが、姉様何うな

さる御精神なの？。』

と夏子が心配さうに問ねた。

『何うと言つて、私生てる空は無いから、死んで苦惱を脱れやうと思つたのですけれど、到頭妨げられて、死ぬにも死なれなく成つたので、まだ何う致やうといふ考へは無いのですけれど、瀧澤先生が心配せずに、宅へ來て居れと、親切に仰やつて下さるものですから、取敢ず御一緒にお供は致ましたけれど、何うして宜いか我身で我身が分らないんですよ。』

と淋しさうに答へた。

『瀧澤先生が、無論何とか成さるのではございませうけれど、私の願ひは、兄様が歸つて入來しやるまで、何事も辛抱して待つて居て頂きたいのです、無論這度の事は、兄様御存じない事だから、私直に事情を認めて書面を出しますわ、然うしたら兄様何事を措いても、屹度直に歸つて入來しやると思ふわ、その上でお父様

がお亡くなりなすつて以來、母樣の態度が一變した事から、姉樣や私に對しての一伍一什を殘らず話して、這度の事も母樣の策略から出た事で、姉樣に限つて不品性な事がないのは、私が保障すると言つて、必ず元の通りに致ますから、ね、姉樣少しの間辛抱してゐて頂戴よ、誰が何と讒言を申しても、貴女の潔白は朝夕一緒にゐた私が誰より能く知つて居ますから、私を信用して居て下さる兄樣は、屹度私の保證を信じて下さるに相違ないと思ふわ、姉樣は母樣が保科家に居らッしやる限りは、到底元のやうにはならないと仰やるけれど、御一緒に居るのがお嫌なれば、別居の方法は何程もあるぢやありませんか、ですから何事も兄樣の御歸朝までだと思つて、苦しいでせうけれど辛抱して居て頂戴ね、文子は私が貴姉に代つて大切に育てるから、少しも御心配ない事よ。』

赤誠を披瀝して語るのであつた。

『實は瀧澤先生が、順序だから、一應は先生が胖や私に成代つて、母樣へお詫した

上で復緣を願つて遣るとは、仰やつて居て下さるけれど、それは到底承諾して下さる筈ありませんから、然うなつた曉は、弟が御厄介に預つてゐる上に私までが御厄介をかけては相濟みませんから、弟が世に立つまで、何處かへ御奉公でもして居て、一生獨身で送りますわ、いくら旦那さまがお歸りなすつても、孝心深い方を、私の爲に母樣に背かすやうな事をしては、私が相濟みませんから、何事も運命だと思つて諦めますわ。』

と密と不覺の涙を拭いた。

『ですけれども、兄樣は貴姉を深く信じて居らッしやるから、離緣の理由を信じないばかりでなく、屹度母樣の不法を責めて、斷然別居なさると思ふわ、私も保科家の爲にそれを希望してるわ、母樣は新藏さんを連れて、別居するのが御自分の希望で居らッしやるんだから、双方の爲に宜いわ。』

『私の不行屆きを赦して下すつて、元の境遇に成れるなら、それはこの上もない幸

福ですけれど、他の事と違つて、貞操問題で恁ういふ不幸を招いたのですから、それは到底赦されないと思ひますわ、しかし何れに成るとしても、貴女が私に盡して下すつた御親切は、終生忘れは致ませんから、設令この儘他人になつても、時々消息を知らして頂戴ね……』ほろりと落涙した。

『あら姉様那樣悲しい事仰やらないで頂戴な、私一身を犧牲にしても、貴姉は必ず歸つて頂くやうに致ます。それも兄樣が歸つて入來しやるまでの御辛抱ですから落膽せずに待つて居て下さい、私、この儘貴姉に別れるやうな事に成つたら、死……死んで了ひますわ……』

と泣出した。

『貴女と私は、何うして這麼に仲が宜いのでせうね……いつ〳〵までも眞實の妹だと思つて居るから、姉効の無い私ですけれど、死ぬまで可愛がつて頂戴ね……』感涙に咽んだ。今まで兩女の話を、傍に居て熟と聽いて居た胖は、夏子の赤誠に感

涙を泛べつゝ、

『夏子さん、僕貴女の御親切を聽いて、覺えず貴涙を零しました。僕からも深くお禮を申します……しかし姉の離緣問題に就きましては、確に姉に缺點があつたのですから、如何とも致し方ありませんけれども、貞操を破つたとか、女の道に背いたとか、然ういふ品性に就いては、貴女の仰やる如く、姉に限つて、決して疑ふべき點は無いと信じて居りますが、唯大村のやうな人間を、近づけたといふのが缺點だと信じるのです、況して彼等如きに乘ぜられて、離緣の理由となるべき擧動をさせたといふのは、姉の不注意と言はなければならないです。ですから豫々缺點のあれかしと望んで居た人は、奇貨措くべからずとして、今日の不幸を見るに至つたのですから、姉の品性と、嫁姑間の內情を知つて居る者は、姉に同情して下れるかも知れないですが、世の多くの人は、確に姉の品性を疑ふに相違無いと思ふです。就いては兄樣がこの離緣に對して如何なる解決をなされるか

これが姉の死活に關する問題ですが、姉の品性を承知して居られる兄様は、恐らく貞操を疑はれるやうな事は、萬あるまいと信じますけれど、しかし信じながらも親に背いてまで、復緣を決行されるや否やは豫め想像する事は出來ないです。ですから何事も今日と成つては、成行に任せて、この儘に成るとも、復緣するやうに成るとも、運命に任せる外ないと思ひますが、唯殘念なのは、離緣されて歸つても居るに家のない東家の今日です、僕がせめて中學でも卒業して居たら、離緣されて歸つて來ても、姉に心配させずに慰めて遣る事が出來るのですけれど、瀧澤先生の厄介になつて、漸く修學して居る狀態ですから、眞箇姉に對して氣の毒で耐らないです。しかし假令不幸にして、この儘保科家と親戚關係が絶えるとしても、貴女が姉に盡して下すつた御同情は、永く忘却致しませんから、貴女もどうか姉の品性問題に就ては、兄様の疑念の解けるやう、十分に御辯護を願つて置きます。』

と告げた。

『それはもう仰やるまでもなく、唯今も申上げたやうに、私の一身を犧牲にしても姉様の復緣に盡す決心で居りますから、どうか御安心を願ひます、就きましては私からは無論兄へ詳しい書面を出しますけれど、姉様からもお出し下すつては如何でせうか。』

と深雪へ言つた。

『私からは決死に就いての事情を、詳しく認めて出して置ましたから、貴女から出して下さるなら、私からは御遠慮申して置きますわ、心に疚しい點は無いけれども、左に右今日は離緣された身の上ですから、却て失禮に當りますからね。』

『そんな御遠慮には及ばないと思ひますけれど、それでは私から何も彼も事情を認めて出して置きますから、兄様から書面が參りましたら、返書を上げて頂戴ね。』

『は、私の不行屆きを赦して下すつて兄様から御書面を下されば、歡んで返書を差し

上げますわ。』

深雪等が彼是と慰め合ひ、語らひ合つて居る中に、時計は早くも四時を告げた。夏子は吃驚して、

『おやもう四時だわ、私學校に往つた意りにして鎌倉に出かけたのですから、今日はこれで失禮してよ、遲く成つて學校へ電話でもかけられると、嘘が露はれて了ひますからね。』

『とんだ御心配かけて濟まなかつたわね、どうか堪忍して頂戴ね。』

『あら、堪忍するも致ないも當然の事ぢやありませんか、しかし今朝は、生てる心は致なかつたけれど。御無事のお顏を見て、恁うして別れて歸るんですから、どんなに安心だか知れないわ、意地惡の樣子は、それとなく私が探つてお知らせ致ますから、必ず快々思はないで、辛抱して居て頂戴ね、屹度又御一緒に暮されるやうに私が致ますからね。』

『有難う……どうか文子の事を、呉々も宜しくお願ひ致ますわ。』

『身に引受けて大切に致ますから、必ず御心配なさいますな。』

と、胖へも挨拶した後、盡きぬ名殘を跡に歸つて往つた。夏子を送り出した姉弟は再び元の部屋へ入つた。胖は口惜しさうに、

『何う考へて見ても、お角さんが爲にする所があつて、大村を味方に賴んで企畫んだ狂言に罹つたのですよ、それでなくて、言合したやうに、その場へお角さんが來られるものですか、大村が山浦に使はれて居なければですけれど、山浦に使はれて居るんですもの、屹度喫はすに利を以てして、味方に引入れたに相違無いです……』

『或ひは然うかも知れないけれど、私が大村の辭を信じたのが惡かつたのです、何を言ひかけられても、耳を假さなければ、こんな不幸は招かなかつたのですが、ツイ姑の惡企みを話して遣ると言はれた、その辭に釣込まれて、這麼不幸な目に

遭はされたのです、しかし今と成つては運命と諦めて居ますから、決して他は怨まないけれど、お前さんや先生に御心配かけるのが氣の毒だと思つて、潔く一身を棄てやうと覺悟したのに、思はぬ人に救けられて、到頭恁うして、先生の御厄介に成るなんて、眞實お氣の毒だわね。』

『氣の毒には相違ありませんが、しかし非常な場合で、先生も事情を能く御承知の事ですから、お世話序でに御厄介に預るんです、その代り今に僕が世に出たら、必ず御恩返しを致ますからね。』

と慰めるのであつた。

『私も愈々總てが解決して了へば、永く御厄介をかけないで、相當な家へ家庭教師にでも雇はれて、お前さんが世に出るまで辛抱致やうと思つて居るのよ、いくら御親切に仰やられても、姉弟二人が御厄介になつては居られないからね、聞けばお前さん、文展へ何か描いてお出しのやうな御書面だつたが、何か描いて出した

んですか。』

『は、學校の餘暇に一生懸命になつて描いて出すには出しました、が初めての事ではあるし、本年は美術奬勵會が特別賞として、優賞者一人へ、一千圓贈與する事に成つたものですから、全國の美徳家が、非常な勢ひをもつて出品した爲に、例年から比較すると、殆ど倍數の出品だと言ひますから、到底入選は難かしからうと思つて居ますが、今日から審査が始つたのですから、一兩日には結果が知れやうと思ひます。』

『先生に見て頂いたのでせうが、先生は何と仰やつて?。』

『先生は、他の繪と異ふから、自分が思ふ存分に描くが宜いと仰やつて、一度も見て下さらないから、お目に懸けずに出して了ひました。ですから良いか不良かは少しも分らないんです。』

三一　號外

『有繋に先生は異つて居らッしやるわね、普通の先生なら、何うかして入選させやうと、惡い所は指摘して下さるけれども、お前さんに實力の修養を爲せやうと思つて、故と放任なすつたのだわ、どんな繪が出來たか知らないけれども、萬に一つも入選致やうものなら、眞箇自分の實力だから、這麼名譽な事ありませんわ、私は明けても暮ても、お前さんの世に出る事のみを、神佛へ祈つて居るのですから、どうか入選させたいと思つて居るのですけれども、那樣競爭では到底覺束ないわね。』

と深雪は失望さうに言つた。

『僕としては、全力を傾倒して描き上げたのですから、あれで入選致なかつたら、自分の手腕が到らないのだと、斷念める外無いです、三週間といふもの殆ど何事

をも忘れて揮毫したのですからね。』

『優賞を望む事は出來ないけれども、せめて選にでも入れば宜いがね、文展の今日は、美術家の試金石場となつて居るから、入選だけでも美術家として世に立つには、確に立脚地と成るのだからね。』

姉弟が頻に出品畫の話に耽つて居る時しも、

『號外……』

と消魂しく叫んで、新聞配達が號外を投入れた聲が聞えた。

『こんな平和な時に、何んの號外でせうね。』

と深雪が懸念らしく言つた。

『近頃は飛行機流行で、飛行機の事が能く號外に出ますから、飛行機でも墜落したのぢやないでせうか。』

言ひつゝ立つて號外を取りに往つたが、忽ち勇ましげに、

『姉様大違でした、日本の新聞社も進歩しましたね、文展の入選者を號外で知らせたのです。』

『だッて今日始まつたばかりぢやありませんか、それに何うして入選者が分つたのでせう！』

『全部ぢやないです、今日審査の結果、入選と確定した分だけと記してあります。』

『早く御覽よ、お前さんのは載つて居ないか。』

「……。」

胖は夢中になつて眺めて居つたが、忽ち驚くやうな聲を出して、

『姉様、入りました。』

『えゝッ、本當に！』

『本當です、江上の詩聖、東雪華と記してありますから、恐らく間違ではあるまいと思ひます。』

『まあそれは何といふ欣ばしい事でせう、私餘り嬉しくて涙が零れました。お前さんの一心が繪の上に表れたんでせう、先生も定めて欣んで居て下さるでせうね。』

と嬉涙を拂ふ。

『姉様欣んで下さい、まだ恁ういふ事が記してあります（本日確定の入選畫は、審査員一致の推選に依るものにして、出品畫中殊に注目に値する作品のみである。就中東雪華氏の江上の詩聖、野山九聲氏の湖畔の清秋と題する二大作の如きは文展開設以來稀に見るの出來榮である）僕夢ぢやないかと思ひますが、實際でせうか。』

『そゝそれは實際ですとも、新聞の號外ぢやありませんか、そんな立派な繪が何うしてお前さんに描けたでせうね……私もうそれを聞いて、自分の軀なんか何うなつても管はないわ、能くもそんな傑作が出來ましたね……お父様やお母様も、地下で欣んで居らッしやるでせう……私、嬉しくて、も…ものが言…はれま…

せん……』

雨々と泣くのであつた。

『これも皆な先生の賜物です……しかし姉様幸に好評を博するやうな事があれば

これが世に出る第一歩に成るのですから、やがて東家の再興が出來ますよ。』

『東家が絶家同様な狀態に成つたものだから、どんなに輕蔑されたか知れないから

一日も早く再興したいと、それればかりを祈つて居るのだから、どうか立派な美術

家に成つて、これ見よがしに世に立つて下さいね。』

と又しても涙を零す。

『屈せず撓まず研究して、必ず立派な美術家に成つて、今に東家の再興を計ります

から、今暫く待つて居て下さい。』

かゝる談話の折柄へ、

『お歸り……』

といふ叫聲が聞えた。

『先生がお歸りに成つたんです。』

『然う……』

と姉弟は言合せたやうに、急いで玄關頭へ出迎へた。雪山は例になく笑を泛べて俥

から降りて來た。

『お歸り遊ばしませ。』

『お歸りなさいませ。』

兩手を支へて異口同音に挨拶した。雪山は會釋しつゝ奥へ入つた。深雪も續いて入

つた。そうして彼女は、何彼と雪山の世話をするのであつた。胖は又己が室に入つ

て、曇の號外を眺めて居た。

やがて雪山は深雪が行届いたる世話に、衣服など更めて座に着いた。深雪は直に茶

を容れる用意に掛つた。

『胖君を呼んで下さらないか。』
雪山が言つた。
『はい、承知致してございます。』
容れかけた茶器をその儘に、深雪は立つて胖を呼ぶべく去つたが、やがて胖を伴うて入つて來た。
『何か御用でございますか。』
と胖が問ねた。
『何有別に用事は無いが、深雪さんが茶を容れて下さるやうだから、茶を嚥みながら、出品書の狀況を話して聞かせやうと思ふのだ。』
『左樣ですか、是非どうかお聞せを願ひます。』
すると深雪が、
『先刻の號外を先生へ御覽に入れなさいよ。』

と注意した。
『何の號外だ。』
雪山が問ねた。
『まだ御覽にならないですか。』
『會場から直に歸つて來たから號外などは見なかつたが、何か變つた出來事でもあつたかな。』
『それでは持つて來て御覽に入れませう。』
胖は立つて己が室へ往つたが、やがて一葉の號外を持つて來た。雪山は眼鏡を取出して靜に讀むのであつた。かゝる間に深雪は、茶を容れて雪山に進めた後、
『それでは貴方も御接伴なさい。』
と胖にも與へた。雪山は讀了ると共に、
『これは意外ぢや、こんな號外が出やうなぞとは少しも豫期して居なかつた。國民

の美術思想が非常に發達したものだから、こんな事を號外として知らせるやうに成つたと見える。しかし日本の新聞もなか〳〵機敏に成つて來たね。』

と件の號外を下に置いた。

『しかし先生、この號外に書いて有るのは、事實でせうか。』

と胖が問ねた。

『事實だとも、今日審査の結果は、この號外に記してある通り少しの相違もない。だからお前さんにその事を話して歡ばして遣らうと思つたのだ。尤もまだ審査を終つた理ではないけれども、今日審査した中では、野山九聲の湖畔の清秋と題した畫と、お前さんの出品畫とが、出色の出來榮なので、審査員一同が非常に賞讃して居るのだから、他にそれ以上の傑作が無い限りは、先づ優賞を得るであらうと思はれるが、野山はこれまでも優賞を得た人だから、お前さんが次點に成るかも知れないと思ふのだ。』

三三 天才

胖は滿面に笑を湛へて、

『若し優賞を得るやうな事がありましたら、それは眞箇僥倖に過ないですから、到底野山君のやうな、實力のある方に打勝つ事はならないと思ひますけれど、恁うなりますと、例の美術奬勵會の特別賞がありますからね、得られるものなら得たいものですが、先生のお見込は如何でございませう。』

と問ひ試みた。雪山は茶を啜りながら、

『何しろまだ仔細に鑑別した理でなく、展觀すべき畫を大體に選んだまでゝあるから、お前さんや、野山君以上に優れた畫があるかも知れず、それに審査員が各自に意見を異にする場合もあれば、畫の流派に依つて、偏狹な考へを持つて居る人が無いとは言へないから、確とした意見を述べる事は出來かねるが、私は自分の

門生といふ、最負眼があるかは知らないが、今日見たゝけの出品畫の中では、彌張お前さんの繪が非常の出來榮だと思つて居るけれども、採點の結果、果して優賞を得られるか否やは、今日の場合まだ斷言致かねるな。』

『私のやうな未熟な腕で描いたのですから、入選も覺束無いと思つて居ましたのが幸ひに入選したばかりでなく、注目されるまでになりましたのは、皆な先生の御高恩に依るのですから、設令僥倖にして入賞致しましても、益々戒めて、熱心に研究致ますから、この上ながら御薫陶の程を願ひます。』

『研究は怠つてはならないが、しかしお前さんは天禀の畫才を有つて居るのだから這度の出品畫の如きは、前人未發の描法と、彩法とが顯はれて居る上に、構圖の巧なこと、人物が悉く活躍して居る事、遠近法が自然に整つて、畫面に深味のある事、主たる伯樂天の性格が、遺憾なく發揮されて居る事、秋の江上の寂味が表はれて居る事、その上に非常な新味が見えて居るから若し這度の出品畫が、偶然

の結果でなく、根底のある研究の結果、出來上つたものとすれば、恐らく今日の青年畫家に、お前さんほどの手腕を有つた人は、他にあるまいと思ふのだ、私は偶然の結果でなく、お前さんが覺悟があつての結果である事を、衷心から望むのだ。果して覺悟あつて描いたものであれば、數年を出ずして、我美術界に一勢力を有する大美術家に成り得られるからな。』

と激賞して勵ました。

『僕は先生の仰やるやうな天才どころではありません、寧ろ非常な鈍物だと、自ら覺悟して居りますが、しかしです恁う申すと生意氣だとお叱りを受けるか存じませんけれど、今日の日本畫は西洋畫のそれに比較して見ますと、第一寫實に乏しうございます、畫面が扁平で深味に缺けて居ります、遠近法なり賦彩に注意と研究が足らない爲に、自然の情調が缺けて居ります、流派の法式に擒へられて、描線の上にも缺陷があります、美術といふ立場から見て、全幅の綜合美が缺けて居

ります、もう一つは繪その物に生命卽ち魂が入つて居りません、僕は昨年以來これ等日本畫の缺點に就いて、始終研究を續けて居りましたが、這回の出品畫には、從來の流派を捨てゝ、大膽に研究の結果を試みて見たのですから、若し入選すれば僥倖、入選致なければ、まだ研究が足りないのだと覺悟して居りました、ですから決して空中へ樓閣を築くやうな、根底が無い理ではなかつたのでございます。』

と物語つた。

『お前さんは確に天才だ、出藍だ、私なぞは其處に心が附かないではないが、既に精力が續かず、第一流派に擒はれて、その範圍を脫れる事が出來なくなつて居るから、依然として舊套を守つて居るけれども、今日の靑年畫家は、その點に努力して東洋畫の完成に盡さなければならない。』

雪山は尙も語を繼いだ。

『お前さんが、然ういふ研究の結果、あの畫を描いたとすれば、私はこの上もなく安心致ます、これでこそ、知遇を受けた博士の御恩に、酬ゆる事が出來るばかりでなく、今日まで薫陶した効もある理だし、又早晩東家を復興する事が出來る理だからな。文展の結果は、今後二週日位經たなければ、審査の結果を發表する運びにならないであらうけれど、幸ひにして入賞すれば、立脚地が作られる理だから、撓まず一層研究致なければならない。』

と訓戒した。

『まだ〳〵前途遼遠ですから、益々研鑽致します、どうか御安心を願ひます。』

と答へた。すると今まで師弟の談話を、凝と聽いて居た深雪は、嬉涙を零しながら、

『私は先刻その號外を見まして、眞僞は分りかねますけれども、覺えず嬉涙が零れましてございます、恁ういふ不幸な身の上ですから、今日では弟一人が賴みで

どざいますのに、何を申しましても、まだ十七の小兒上りで、先生の御保護に依つて、漸く學校にも通ひ、畫の研究もさせて頂いて居る有樣ですから、この先何うして身を立たら宜いか知らと、非常に悲觀して居た折柄へ、この人の畫が入選したばかりか、文展開設以來出色の繪であるといふ、號外だものですから、自分の身の不幸も忘れて喜びましてございます、唯今お話を承はりますと、意外に好く描けたやうでございますけれど、これと申しますのも、皆な先生が御薫陶下すつた賜物ですから、空疎かに思つてはなりません、私からも厚くお禮を申上げます。』

と禮を述べた。

『いや、私も胖君だけは、多くの門生中でも、特に親切に敎へては居りますが、今も言ふが如く、天稟の畫才があるのと、一は境遇上から來た、奮發が產み出した結果だと思ひます、艱難汝を玉にするといふ諺に違はず、東家の零落といふ不

幸が、胖君の頭腦を深く刺戟して居るのに、貴女から奮勵を促した書面が來たものですから、早く畫家といふ地歩を世に占めて、一日も速に東家を復興致やうといふ念慮が一層燃えて來たのです。研究した結果を試みたいと思つて居る矢先へ境遇上の刺戟が痛切に加はつたものだから、何でも彼でもといふ、火のやうな熱心が湧いて、それが這度の畫の一描一線に傾倒されたから、知らず識らずの中に、あゝいふ生きた畫が出來上つたのです。しかしこの勢ひをもつて研究さへ怠らなければ、東家の復興も餘り遠くはあるまいと思ひますから、それを樂みに、餘り悲觀せずに、監督でも致しながら遊んで居らッしやい。』

と慰めるやうに言つた。

『有難う存じます、私の身は自殺致やうとさへ決心したほどですから、この人が世に出ますまでは、死んだ意になつて、奉公にでも參る覺悟で居りますけれど、どうかこの上ながらこの人の御薫陶だけは、幾重にもお願ひ申します。』

と涙ながらに頼むのであつた。

『胖君だけは、私が引受けて居ますから、必ず世に出るまでの世話は致ますが貴女もです、那樣お心遣には及ばないから、宅の世話でも致て下すつて、胖君が獨立するまで暢氣に遊んで居らつしやるが宜いです。』

と親切に慰めた。

『御親切は身に沁みて有難く存じますけれど、私の一身は何うか心任せにさして頂くやうにお願ひ申します。』

『しかしそれは今夜決しなくとも、緩々相談するとして、まあ〳〵當分は快々ならずに、暢氣に遊んで居らッしやい。』

『有難う存じます。』

三四　共謀者

淺草雷門脇の牛肉店金子の二階の片隅に陣取つて、牛肉を煮ながら酒酌み交して居るは大村虎一と、川北賢一の兩人である。賢一は紺絣の袷に對の羽織を着て、左の手を懐中に入れた儘、呷と酒を傾けて、

『君が直に往くから雷門で待つて居れと言つたものだから、山浦の家を出ると電車に飛び乘つて、雷門へ來る事は來たけれども、いくら待つても君が來ないものだから、殆んど三時間待つたよ、一體何をして居たのだ。』

と不服さうに言つた。大村は肉を食べながら、

『これでも一生懸命早く來た意だ。何しろ談判して、それから金子を占めなきやならないものだからね。』

『それで結果は何うちやッた、旨く行つたか。』

『敵手もさる者だ、何うして此方の要求通り出すものか、辛と五十圓だけ握つたから、此處で十分に食べたり飲んだりして、それから吉原へ進擊するのだ。』

『何うぢやつた、僕の僞刑事は、信用したらしかつたか。』
『談判の眞最中へ、刑事が尋ねて來たといふから、註文通りの成功さ。』
『實は僕唯た一度限だけれども、新藏君に連れられて、山浦の家へ往つた事があるから、顏を覺えて居られると大變だと思つて、ハンチングを眉深に被つて、成たけ顏を見られないやうにして居たけれども、いくらづぼら者の僕でも、びく〳〵ものだつたさ。何しろ官名詐稱だからね。』
『他の者は顏を見ないから、無論正物の刑事が來たものだと信じて居たが、直接顏を見た山浦の娘もスッカリ信じて居た樣子だッたよ。』
『もう去年の暮の事だし、それに娘とは餘り口を利かなかつたから、もう忘れて居たかも知れない。』
『無論然うさ、去年の事なら忘れて居るに相違ない、それはもう安心だが、しかしこの事は口が腐つても新藏に話して下れちや困るよ、新藏に話すと、直に山浦始

め相手に知れて了ふからね。』
『それは君と僕との絶對秘密さ、僕だつて僞刑事といふ詐稱罪を犯して居るぢやないか。』
『はゝは違ひない、するとそれは絶對秘密として心配なしだが、今夜は何樓へ往くのだ、君へ奢るのだから君の望の家を奢るよ。』
『然うだね、五十圓占めたのなら、大店へ進擊しても宜いのだが、この間是非と言つて居たから、河内樓で我慢するよ、紫の奴すッかり參つて了つてるからね。』
『惚けなんか舍せよ、それでは盛に飲んで出かけやうぢやないか。』
『贊成だね。』
『君は河内樓へ度々往つたのかい。』
『何有、度々と言ふほどでもないが、それでも五六回は往つたね。』
『一人でかい。』

『新造君と一緒だよ。』

『それで今でも新藏君は往くだらうか。』

『彼奴は詩に夢中になつてるから、一昨晩も出かけた筈だよ。』

『そいつは劍呑だね、ひよつと彼奴が往つて居て、顏でも合せると大變だから、河内樓はよして、外に致やうぢやないか。』

『成程その邊も考へなきやならないね、それでは角海老に變へやうか。』

『角海老にも馴染が居るのかい。』

『あるさ、彼處には左近といふ馴染が居るが、河内樓へ往くやうになつてから、暫く往かない。』

『それぢや角海老と極めて、進擊致やうぢやないか。』

『宜からう、酒はもう澤山だから、直に進擊致やう。』

『おい姐さん會計だ。』

三五　意外の電報

佛蘭西巴里の客舍にあつて、只管飛行機の製造と、その操縱術を研究しつゝある保科幽吉は、其家の主婦から、一通の電報を手にした。父信行の死去の際、訃電を手にして以來、日本からの電報を手にするのは、これが始めてであるから、不安の眉を顰めつゝ、封を披いて見るのであつた。

ミユキ、ジヨウフトフギシタ、グンバミツケ、リエンシタ、イサイテガミ、

と記してあつた、有繋物事に動じない幽吉も、この電文を見ては、驚かざるを得なかつた。

『實に意外な電報を受取つたものだ、東博士の嚴正な薫陶の下に育つたあの深雪が情夫などあらう筈もなし、女の道に背くやうな事は無い筈だが、何う言ふ間違で離緣なぞしたものか知ら……委細書面としてあるからは、日ならず事情は知れ

るであらうけれど、しかし文子といふ小兒まである事だから、輕卒に離緣されては困る……左に右返電を打つて、私が歸朝するまで、離緣を見合せさす事に致やう……』

と直に返電を認めるのであつた。

スグカエル、ミユキリエンミヤハセヨ、

かう認めて、打電したが、尙も電文に就いて想像に耽るのであつた。

『情夫!? 果してあるとしたならば私が出發後であらうか、それとも以前から那樣者があつたのであらうか、否々深雪に限つて那樣品性の女ではない、苟にも疑ひを挾むのは私の過だ……私と結婚するまで、確に處女であつた、殊に深雪の愛情は、私の愛情と堅く〳〵結び附けてあるのだから、他へ動く筈がない。』

と打解すやうに言つたが、忽ち又眉を顰めて。

『しかしだ、この電文で見ると、現塲を見附けたから離緣したとあるが、して見る

と確に怪しむべき何等かの形跡があつたものに相違無い、實に不可思議千萬だね果して愛情を二つにするやうな不貞な行爲があつたであらうか……若しあつたとしたらば、相手は何者であらう……深雪ほど意志の潔白な女の心を搔亂した相手は何者であらう……深雪の今日は、如何なる誘惑を受けたからと言つて、その誘惑に迷ふやうな境遇ではない筈だ、文子といふ身にも生命にも換へられない鎹があるのだからね……しかし智者も學者も迷ひ易いのは、戀愛の途だから、不圖した心の狂ひから、浮と誘惑に乘つたのかも知れない、吁々更り解らなくなつて了つた、だがしかし事實あつたとして、離緣したとすれば、深雪の軀は何う處置をしたのか知ら……東家は廢家同樣になつて、胖は瀧澤の家へ厄介になつて居るほどだし、歸るべき家がないぢやないか……そうして又乳呑盛りの文子は何うしたのか知ら……離緣するからには、深雪の手を離したに違ひないが、先日夏子から寄來した書面で見ると、お光にも暇を出したとあつたから、乳母も居ないであ

らうが、何うして育てる考へか知ら……電報は打つたものゝ、既に離縁したとあるからは、保科家には居ないに相違ないから、何の効力もない理だ……左に右父の死去後の整理もあるし、研究も十分とまでは行かないけれども、普通の目的は遂げたのだから、便船を問合せて、早々行李を整へて歸る事に致やう、この樣子から想像すると、家庭が非常に紊亂して居るに相違ない、離縁問題の解決は、歸つた上で、事の眞相を質した上での事だ……』

かく決心すると共に、直に新聞を開いて出船の廣告を眺めるのであつたが、幸ひ五日目の午後に、リオンを解纜する日本郵船會社の長門丸のある事が分つたので、俄に行李を整へるやら、知己友人に告別するやら、大騷ぎをして歸朝の途に就いた。

三六　文子可愛や

『母ちやん……母ちやん……母ちやんへ往く……母ちやんへ……』

と泣き叫ぶのは文子であつた。彼兒はお角に連れられて、鎌倉から歸る汽車の中から、深雪を慕ひ始めて、新橋へ着くまで、母ちやん、母ちやんと叫び通しに泣き叫んで、有繋のお角も非常に當惑したが、保科家へ歸つて以來も、思ひ出してはかく泣き叫ぶのであつた。爲に可憐にも其眼は泣腫れて、限りない傷らしさを覺えしめるのであつた。

『おい〳〵鶴さん、早く文子を賺してお遣りよ、又始めたぢやないか。』

と山浦の娘鶴子に恁う言ひ附けたのはお角であつた。鶴子はお角が山浦家を訪ふた時、共に保科家へ連れられて來たのである。

『致樣がないぢやありませんか、何と言ひ聞かしても、直に母さんの連發ですもの根氣が盡きて了ふわ。』

とお鶴は眉を顰めつゝ言つた。

『だつてお前さん、文子を手馴附けてお前さん以外の人には見向も致ないやうにし

て置かなければ、幽吉が歸つた節に、勸めやうが無いぢやありませんか、自分の好な人と夫婦に成らうと言ふには、その位の苦勞は當然だわ、早く抱いて賺してお遣りよ。』

諭すやうに言つた。お鶴は苦笑しつゝ文子の傍へ往つた。

『文ちやん何うして那樣に聞別がないの、いくら泣いたつて、母ちやんはもう居ないと言つてるぢやありませんか、さあ〳〵お菓子を上げるからもう母ちやん、母ちやんと泣くぢやありませんよ。』

と抱き上げながら賺すのであつた。文子は益々泣き聲高く、

『母ちやんのお乳飲むの……母ちやん往く……母ちやん……』

と叫ぶのである。お角は鋭い眼を睜つて、

『何故然ういつまでも、あんな女を母ちやん、母ちやんと喧しく言ふのです、彼女はお前さんの母ちやんではありません、もう餘所の人です、いつまでも母ちやん

母ちやんと泣くと、抓々ですよ。』

と睨み附けた。頑是ない文子は其怖い目を見て益々泣き出した。

『えゝ……この餓鬼は、何て剛情だらう、忌々しい。』

と愛らしく豐かな頰を強か抓つた。

『痛い……痛い……』

と悲鳴を上げて泣き出した。

『何て可厭な餓鬼だらう、大きな聲をだして。』

と口の歪むほど又抓つた。もう聲を立てる勇氣はなく、泣入つて了つた。

『えゝッ忌々しい、そんなに泣くなら何うなりと勝手に致な……』

とお鶴が、投げるがやうに投り出して了つた。

『宜いから打遣つて置きな、泣くほど泣かして遣るが宜い、いくら賺したつて承く奴ではないからね。』

『何うして這麼に强情なんでせう、こんな時には直に母親の事なんか、忘れて了ふものですがね。』

お鶴が感心したやうに言つて、投り出された儘、悲鳴を上げて居る文子を眺めるのであつた。

『情夫を作つて逢曳するほどの女が產んだ小兒だもの、親の心を受繼いで、それで這麼に强情なんだ、どうせこの子供も大きくなつたら、母親位な事は遣りかねないさ。』

と口汚く罵つた。

『ですけれどもこんなに泣き通しに泣いて居たら、病氣を起しはしないでせうか。』

『病氣でも起して死んで了へば、世話がなくて宜いぢやないか、いくら邪魔になつたからツて、豈夫手を下して殺す理には行かないからね。』

『私眞箇子供嫌ひですが、何ういふものでせう、嫌ひな者には澤山出來るさうですわね。』

『能くそういふ事を言ふけれども、當にはならないよ、私なんか彌張小兒は大嫌ひだつたけれども、新造一人限より無いんだからね。』

『ですけれども、いくら嫌ひだつて、一人や二人は無くちや困りますわね、叔母さんだつて、新造さんがあつたればこそ、こんな氣樂な身分になれたのですから、夫婦の中の鎹には、どうしても子兒は必要だわ、氣に入らなくても、小兒まであるからと、ツイ辛抱しますからね。』

『だから心配してるのよ、幽吉が歸つて來て、鼻の下を延ばして、深雪を復緣さすと言ひはしないかと思つてね、幽吉は人一倍子煩惱の方だから……』

『ですけれども、いくら小兒が可愛くたツて、不義密通した人を、復緣させはなさらないと思ひますわ……幽吉さんだツて、立派な紳士ですもの、體面に關るぢやありませんか。』

文子はまだ泣き續けて止めさうにもない。お角は瞥々と怖い目を、時々文子に浴せながら、

『それは然うだけれども、元々好で貰つた戀女房の事だから、いくら不義密通された女でも、諦めが附かないであうと思ふのだ。』

『だツて若し那樣事にでもなれば、私いくら叔母樣のお傍に居たくても居られなくなるぢやありませんか。』

『まあさ、那樣事すると言つても、私が居る限りは爲せは致ないけれども、言ひ出すかも知れないといふ心配さ。』

『しかし叔母樣、幽吉さんが私では氣に入らないと仰やつたら、何うすれば宜いんでせう、何か好い方法がありまして？』

『其時は退引ならない方法が附けてあるから、少しも心配ありませんよ、だけれども、お前さん、日本式の髪なんかすつかり舍して、成丈けハイカラ式に作らなけ

れば、幽吉は以前から下町式が大嫌ひだつたのに、這度は洋行して歸るのだから一層ハイカラ好に成つて居ますよ。』

『歸つて入來つしやれば、直にハイカラ式にしますけれど、私が廂なんか出して束髪に結ふと、近所の人達が不思議相に眺めるんですもの、極が惡いから歸つて入來しやるまで、これで通しますわ。』

『喧しい餓鬼だね、いつまでも能く泣かれるぢやないかね。』

とお角は文子の方を忌々しげに眺めて、

『歸るまでそれで通すと言つて、俄に束髪に結つたつて徒目ですよ、暫時束髪に結つて癖を附けなければ、借て來た頭のやうで可笑いわ、いつやらお前さんが束髪に結て來た時、深雪と列んで居るのを見ると、比べ物にならないほど見劣りがして、お前さんの束髪は、どうしても日本式の束髪で、ハイカラ所か、却て滑稽だつたわ、親族の最負眼が見てさへ、見劣りがするのだもの、幽吉の眼から見ては

どんなに滑稽に見えるか知れないから、これからは此家に居るものだから誰に笑はれる心配もないから、その油をすつかり洗ひ落して了つて、ハイカラ式にお結ひなさい。』

と命令するやうに言つた。

『それでは早速洗つて、癖直しをして結つて見ますわ。』

文子は又歔欷しつゝ、

『母さん……叔母ちやん……』

と叫ぶのであつた。彼女が叔母と呼ぶのは夏子の事である。

『えゝッ喧しいまだ言ふ事を聞かないのか。』

と又お角が怖い目をして叱り附けた。

『眞箇執念深い小兒ですね、私到底もお守は出來ませんわ。』

『何有、まだ昨日の今日だから、あんなにも慕つてるけれど、去る者日々に疎しで

四五日も經てば忘れて了つて、屹度馴染むに極つて居るよ。』

三七　夏子

『叔母さん電報が來ましてよ、幽吉さんからではないでせうか。』

とお鶴がお角へ渡した。

『然うかも知れないね、もう來なければならない順序だからね。』

言ひつゝ封紙を破つて眺めるのであつた。

『それ御覽よ、私の想像通りだつた、スグカエル、ミユキリエンミヤワセヨと在るわ、呆れた二本棒ぢやないかね。』

『まあ隨分ですね、不義密通したといふ電報を見ながら、見合せと仰やるのは、何ういふお考へなんでせう、不義をした女でも厭はないから、離緣致ないと仰やるんでせうか。』

『無論然うですよ、呆れて了ふぢやないかね、意氣地無しが、學士だなんて威張つてる癖に……離緣して了つたものが、今更見合せられるものか、莫迦々々しい。』

『戀女房はそんなに宜いもんですか知ら……打遣つても置かれないでせうから、もう一度電報を打たしては如何です。』

『然うね……リエンシテシマツタモウダメとでも打つて遣らうかね。』

『それが宜ざんす、然うすればいくら未練があつても斷念してお了ひなさるわ。直にお打ちなさいよ。』

とお鶴が勸めた。

『それでは電報用紙を出して、お前さんちよいと書いて打たして下さい。』

『は、承知致ましてよ。』

とお鶴は電報用紙を取り出して、お角が言つた如く認めて、女中に命じて打電させた。

『直に歸るとしてあるから、電報の屆かない中に出發するやうな事ないか知ら…』

『いくら直にと書いてあつても、多少の準備といふものがありますから、まだ出發なさるやうな事ありませんわ。』

『それも然うだね、するとそれは宜いとして、お前さんに注意して置くが、夏子はお前も知つてる通り、大の深雪黨だから、決して心を許してはなりませんよ、年齡こそまだ十六だけれど、我々も及ばない智惠があるから、どんな事から秘密を知つて、幽吉に告げないとは言へないからね。』

『大丈夫です、決して氣は許しませんかち、悟られるやうな事ありませんわ。』

ところへ夏子が學校着の儘入つて來た。

『唯今……』

と挨拶した。

『お歸りなさい。』

とお鶴が挨拶した。すると夏子はお角に向つて、

『母様、私今朝出がけに、姉様から書面が來ましたので、學校へ往く電車の中で讀んで見ましたら、大變事が書いてありましたから、吃驚して學校へ往くのを舍して、鎌倉へ往つて來ましたが、母様大變な事なさいましたのね、何うして姉様を御離緣なぞなすつたんです、どうか詳しい事情を聞かして下さいな。』

と顏色を變へて迫るのであつた。お角は生意氣だと言はぬばかりに、

『そんな事お前さんなぞの聞く事ではありません、離緣致なければ、保科家の體面に關はる事があつたから、それで離緣したのです。』

と戒めるやうに言つた。

『聞かせないと仰やれば、强ひてとは申しませんが、姉様からの書面に依つて見ると、大村といふ、以前姉様の御生家に御厄介になつて居た、心の良くない人が訪ねて來たので、其人に會つて話して居らつしやる中に、姉様へ失禮な振舞を致か

けたので、抵抗して居らつしやる所へ、突然母様がお出になつて、不義をなすつたとお責めになつて、到頭御離緣なすつたと書いてありますが、眞箇それに相違無いんですか。』

『まあ那樣事まで書いて寄來したの？恥知らずの女だね。』

お角は蔑むやうに言つた後。

『そんな事まで知らして寄來した上は隱す必要はなくなつたから、殘らず話して聞かせますけれど、決して他言してはなりませんよ。』

と注意を與へた後、大村と道ならない振舞をして居る現場を取押へた結果、保科家の體面を考へて、直に離緣した旨を語り聞かせた。聞了つた夏子は、

『しかし母様、姉様の書面で見ると、決して母様の仰やるやうな、道ならない事した覺ないから、この事だけは神様に誓つて置くと書いてありますから、私にはどちらが眞實だか、それは分りかねますけれど、しかしですね、姉様の軀は兄様に

屬したもので、殊には母樣も御承知の通り、兄樣が彼方以外の人は、決して貰はないとまで仰やつてお貰ひなすつたほどの間柄ですから、設令道ならない事をなすつたのが事實で、離緣なさるとしても、電信といふ便利な通信機關があるのですから、兄樣へその旨をお知らせなすつて、兄樣の承諾を得て、御離緣なさるのが普通親たる者の採るべき順序ではございませんか、それを何うして兄樣へ御相談もなさらないで、短兵急に御離緣してお了ひなすつたんです、その理由をどうか聞かして下さい。』

と迫つた。この道理ある詰問には、有繋のお角も確と當惑した。が苦し紛れに、

『それではお前さんは、深雪の言ふ事を信用して、私の言ふ事は嘘偽だとお言ひなんだね。』

と不足さうに言つた。

『いゝえ、決して何方を事實、何方を詐りとは、現場を見ない私ですから、それは

申しませんが、他の事と違ひますから、その場で御離緣なさらなければならなかつた其理由をお問ね申すんです。』

と答へた。

お角は愈々苦し紛れに、

『那樣理由なんか、お前さんに話す必要ありません。』

と刻附けた。

『いゝえ、聞く必要があります、お二人の間には文子といふ、可愛い小兒が居るではありませんか、あの頑是ない文子が、昨晩以來あの通り母樣々々と慕ひ續けにして泣いて居るではありませんか、あれが貴母には傷はしいとも可愛相とも思へないですか、今後永い一生を母親の温かい愛情に觸れないで育てなければならない、不幸な身になつて居るのを見ては、私は大に聞く必要があるんです、文子ばかりぢやありません、兄樣も圓滿な家庭をこれが爲に破られたのですから、一生

不幸な境遇に世を送らなければならない事になります、私だつて然うです、平和な樂い家庭で、愉快に送られる身の上を、何方を向いても、不愉快な寂しい顏の人を見なければならないのですもの、どんな不幸だか知れないです、ですから這度の御離緣に就いては、十分に事情を聞くだけの權利がありますわ、貴母にしても、自分の妻でもない人を、肝心の兄樣へ御相談もなさらずに御離緣なさるに就いては、それだけの理由がおありなさるに相違ないぢやありませんか、私それに依つて考へる事がありますから、何ういふ理由で獨斷に離緣したといふ、其御意見を聞かして下さい。』

と追窮した。

『親の權利でする事を、お前さんが左や右言ふ必要ありません。』

『それでは母樣は、保科家はどんな不幸な家になつても、自分の權利だから勝手氣儘にすると仰やるんですね。』

益々追窮した。

『能くつべこべと小理窟を列べる娘だね、お前なんか、親のする事に、喙を容れる必要ないから默つて居らッしやい。』

夏子は沈着拂つた態度で、

『いゝえ默つては居られません、私の爲めには保科家ほど大切なものはないんですから、保科家の不幸になる事や、體面に關はる事を、默つて居る理には參りません、貴母は親の權利だと仰やるけれど、それならば一家の不幸になる事でも、權利でするから、默つて居れと仰やるんですね……失禮ですけれど、貴方に然うい ふ權利を誰が與へたでせうか、能く那樣事が言はれますね、少しは身分といふ事を考へて御覽なさい、亡くなつたお父樣に對して、保科家の不幸になる事を、權利ですると御靈前へ往つて仰つて御覽なさい、仰やられますか、貴方はやゝともすると、私を口汚なくお叱りになりますが、私の母樣が居らッしやる頃、私へ對

して何と言つて居らしッたのです、私は又貴母を呼ぶに何と言つて呼んで居りました、お嬢樣と呼び、お角〳〵と呼ばれた身の上を豈夫お忘れはなさらないでせう、それが今日保科未亡人として、一家の者から尊敬を受ける御境遇にお成りなすつたのは、誰のお蔭です、皆なお父樣の深いお情ではありませんか、その御恩をお忘れでなければ、假にも保科家の不幸になるやうな一大事件を、主人たるべき兄樣へ一遍の御相談もなさらず、親の權利ですなぞと、何うして仰やられた義理です、私を輕蔑してお叱りなさるなら、私これから直に德田の叔父樣へ御足勞を願つて、私が惡いか、貴母が良いかと聞いて見て頂きませう、姉樣は御離緣になつた爲に、悲觀なすつて、自殺して死ぬといふ遺書をお寄來しなすつたのですから、萬一の事でもあると、新聞に出されて、保科家の體面を汚されるばかりでなく、私恥かしくて學校へも往かれなくなるんですからね。』

と、必行くまで言ひ盡した。すると兩人の談判を傍に聞いて居つたお鶴が、お角の

不利と見て取つたから、

『夏子さん、叔母は我任意ものですから、お氣に障る事を平氣で言ひますけれど、どうかお氣に障へないで下さいね、貴方の仰やる事少しも御無理ありませんわ、叔母さん貴女も夏子さんの氣の濟むやうに、事を分けて仰やいよ。』

と仲裁を試みた。德田を呼ぶと聞いたお角は藪蛇を出したと、寧ろ後悔して居た折柄であつたから、夏子の辭は、少からず癪に障りながらも、お鶴の仲裁を奇貨として、

『お前さんの言ふ通り、眞箇私が言ひ過ましたよ、夏子さんどうか氣持を惡くしないで下さいね、實は行懸上親の權利だなんて、とんだところへ權利を擔ぎ出してお前さんを怒らしたけれども、然う言はれて見ると、眞箇私が年齡効もなく逸まりましたよ、一應幽吉さんに相談して、その上で處置致なければならなかつたのですけれど、現在お話にもならない醜態を見たものですから、餘りの腹立たし

さに其場で離縁を宣告して了つたので、決して私が權利を振廻すの、我任意にするのと言ふ、那樣考へで離縁した理ではなく、行懸上、腹立紛しに離縁して了つたのだから、どうかまあ行届かなかつたところは、堪忍して下さいね。』

と狡猾にも謝罪した。

『貴母が然う事を分けて仰やれば、私だつて何にも言ひたく無いのですけれど、それにしても、姉樣が自殺するといふ書面を下すつたのですが、何うしたら宜いのでせうね。』

故と知らぬ顏して言つた。雪山に救けられた事を、大村から聞いたお角はそれと明かには言へないけれど、呑込顏に、

『心に疚しく無い人が何うして自殺するものですか、自殺をすれば、身の言ひ譯が立たなくッて死んだと思はれても、辯解の辭がないぢやありませんか、悧巧な女ですもの、何うして死ぬものですか。』

夏子は益々眞面目顏して、

『ですけれども、それは何とも言へませんわ、あゝ言ふ氣の小さい方だのに、離縁されたからッて、歸つて往らッしやる家がないんですもの、悔しいやら悲しいやらで、ッイ死ぬ氣にもなりますわ、いくら離縁なすつたからと言つて、私は一方ならず御恩を受けて居ますし、兄樣へ對する責任もありますから、自殺するといふ書面を受けながら傍觀しては居られないから、それで今日鎌倉へ出かけましたけれども、別莊からは知つた方を訪ねて往くと仰やつて昨晩お出かけなすつた限り、お歸りにならないから、何うしたら宜いかと、折角電話を掛けやうかと思つて居る折柄だと言ひますから、途方に暮て了ひまして、何處を搜したら宜いか知らと種々考へた末に、警察署へ往けば、屹度樣子が知れると思つて、警察署へ往つてそれとなく聞いて見ましたけれども、今日の午前中は、身投した者も、自殺した者も屆け出がないと言はれたものですから、止を得ず歸つて來ましたけれど

も、私これから警視廳へ電話でもつて、捜索願を致やうかと思つて居ますのよ。』
と告げた。
『お前さんが義理が濟まなくて、捜索願を出すと言ふなら、それは隨意にするが宜いけれども、捜索願を出すと、それこそ新聞へ出されるか知れませんよ、秘密が公然になるのですからね、しかし私は決して自殺致ないと思つて居るから、出す必要ないと思ひますよ。』
『困りましたね、新聞に出されでもすると、眞箇保科家の體面に關しますからね、捜索を願ふのも考へものだわ、ではいくら騒いで見たところが、所在が知れる理ではなし、止むを得ないから、二三日この儘待つて見ませうね。』
『それはお前さんの適宜だわ、私の知つた事ぢやないからね。』
『ですけれども、兄樣へは離緣の事お知らせなすつたでせうね。』
『それは直に知らせました』

『兄樣から御返電は何と言つて參りまして？』
『離緣を見合せよと言つて來たけれども、もう斷行して了つたから、今更見合す理には行かないと言つて遣りました。』
『それ御寛なさいまし、見合せと仰やるのは御自分にお考へが有るからの事ですわ
それでは私兄樣へ對して責任が濟みませんから、これから直に捜索上の事なり、兄樣へ御歸朝して頂くに就いての御相談に、德田まで往つて參ります。』
お角は佛頂面して、
『これから後は、何事も私に相談せずに、一々德田さんへ相談なさい、親は有つても無くても宜いんだからね。』
と厭味を言つた。
『だッて母樣は唯今捜索上の御相談したら、私の適宜にするが宜いと仰やつたではありませんか、私一量見に決しかねますから、それで德田の叔父樣へ御相談に上

らうと思ふのだわ。』

『ですから、何事も德田の叔父樣へ御相談して、私の世話にはならないが宜いと言ふのだわ。』

『この事に就ての御相談に上ると言ふまでの事で、何事に依らず御相談すると誰が言ひまして？しかし母樣が、今後私のお世話は、一切關はないと仰やるなら、それは止むを得ませんから、兄樣が歸つて入來ッしやるまで、德田の叔父樣へお願ひ申しても宜うございますけれど、それでは母樣の責任が濟まなかありませんか知ら……』

『あゝ言へば恁う言ふ、お前さんほど旋毛曲りッてありはしない、一々私に反對するなら、私も考へがあるから、勝手になさい。』

『止むを得ないから勝手に致ますわ。』

三八　放蕩者

今し保科家の一室で、お角と對座して相談して居るのは山浦久五郎であつた。

『新藏にも困つたものですが、何うしたら宜いでせう、暫時放蕩を休めて居たから意見を加へた効驗があつたと思つて歡んで居ると、又近頃時々夜泊りして歸るやうになつたので、これは又始めたかなと、内々注意して居ると、突然私に金子の入用が出來たから千五百圓だけ何でも彼でも借りて下れと、喧しく言つて致方がないですが、何うしたものでせうな。』

とお角の顏色を見た。

『えゝッ千五百圓……那樣大金を何にすると言ふのです。』急込んで問ひ返した。

『再三聞いて見たけれども、唯必要があるとばかりで、何と問ねても何が爲に入用だとは言はないです。』

『そんな曖昧な事に使ふ金子なら、斷然借りて出す事はならないと、何故斷つて遣つて下れないんです。』

『それは貴女の仰やるまでもない、私の事ですから、手酷く刻附けて了つたのですが、酒に醉つて歸つて來ては、私を捉へて文句を列べるので、もう〳〵煩くつて耐らないものだから、止を得ず相談に出かけて來たのです、後から此方へ來るやうに言つて置きましたから、屹度來る事と思ひますから、金子の使ひ途に就いては貴女から嚴重に問ねて見て下さい。』

『何といふ厄介者でせう、私がこれほど行末の事を心配して、お前さん方にまで御迷惑かけて居るのに、いつまで經つても放蕩が休まないと言ふは、到底見込が無いのか知ら……』

と腹立たしさうに言つた。

『私も眞人間にして遣りたいと思つて口の酸ばくなるほど、意見も加へ、賺して見

たのですが、三ツ兒の魂百までの譬へで、意見を加へた當分は、嫌々ながらもいくらか謹愼して居るけれども、一週間と經たない內に、直に忘れて又始めるといふ始末で、外へ出たら屹度酒の香をさせて歸るんですから、あの精神が根本的に治らなきや、到底見込はないと思ひます。』

『困つたものだね、何とか眞人間にする方法は無いものでせうかね。』

『私も種々考へて見ましたが、家を持たして妻を貰つて遣つたら、或は打つて變つた人間にならないとは言へませんが、その外にはこれと言ふ方法ありませんね。』

『私もそれは思はない事は無いけれども、それを實行するには例の一件を致遂げてからでなくつちや、相當な先方から、相當な嫁を貰ふ譯に行かないから、それで延してるのだけれども、幽吉が歸つて來て、あの一件が落着すれば、早速相當な屋敷でも買入れて、身を堅めさす事にして見ませうよ。』

『まあ試みに然うして見るのですね、今日の態度から推すと、果して心機一轉を來

すや否やは疑問ですけれど、それより外にこれと思ふ名案はないですからね。』

「それはそれとして、一體其千五百圓といふ金子は、何に使ふ考へでせう、お前さん想像出來ないかね。』

「これと言ふ想像は附きませんが、遊んだ借金でも責められるので、それで欲いのぢやないかと思ひます。』

「だつて那樣に借金致やう道理がないぢやありませんか、ツイ先月の初めに百五十圓出さして、又二週間ばかり以前に百圓出さして往つたのですもの……』

「それが惡いのです、然ういふ金子をずん〳〵と出して、お遣りなさるから、いつまで經つてもあの放蕩は止まないのです。謂はゞ貴女が遣らせるやうなものぢやありませんか。』

言ふ時女中が、新藏の歸つて來た旨を告げて去つた。

やがて新造は、のそ〳〵と入つて來たが、室內に入るが否や、酒臭い匂ひがぷんと

鼻を衝いた。蓋し彼は空元氣を附ける爲に、殊更に酒を飲んで來たのである。大島絣の上にお召縮緬の羽織を着て、金緣眼鏡をかけた樣子は何う眺めて見ても、純然たる遊冶郎である。お角は酒氣の匂を嗅ぐが否や、眉を顰めて顏を反けた。

『又飲んで來たと見えるね、全きし酒浸になつてるやうなものだね。』

山浦が顏を眺めつゝ言つた。新藏はお角の顏色を窺ひながら傍近く坐つたが、

「惡い病氣に罹りました、何う言ふものか、一時でも酒の氣が無くなると、淋しくて辛抱が出來ないのです、少しでも飲んで居れば、軀の工合が好くて、快い氣地で居られます、結局中毒したのでせうね。』

言ひつゝ卷莨を取出した。

『世の中にお前さんほど怠惰者はありは致ない、少しは自分の身を考へて見るが好い、學問は嫌で、中學も中途で退つて了ふ、親の意見も空吹く風と聽流して、料理屋通は始める、色街へは入る、酒は飲む莨は喫す、それでも何かこれと言ふ職

業でも覺えて、身を立てる方法でもすればまだしも、二十七になる今日まで、毎月々々身分不相應なお金子を使つて、のらりくらりと遊んでばかり居て、若し私共が居なくなつて了へば、何をして世に立つて行く考へです、少しは親の心を察して獨立するまで放蕩を止めると言ふ堅い決心をするが好いではありませんか。

いつも〳〵池の金魚か鯉のやうに、赤い顏をして浮々と遊んでばかり居て何うする意です、私はお前さんの顏を見る度毎に、情なくなつて涙が零れます、同じ兄妹に生れながらも、幽吉は大學を卒業して、洋行までもする、夏子は夏子で女學校へ通つて、初終中優等の成績を表して居るのに、便に思ふお前さんが、その通りの放蕩者で、心配ばかりさせるのだもの、苦勞の絶間がないぢやありませんか

聞けば千五百圓といふ大金が貰つて欲いと、叔父樣へ賴んださうだが、先月も今月も澤山なお金子を持つて往きながら、そんな大金を何に使ふのです、使ひ途に依つては、千五百圓が二千圓でも、出して遣らない事もないけれども、放蕩の爲

に使ふのなら、十圓の金子だッて遣る理由に行かないから、使ひ途を言つて見なさい。』

と小言を言ひながら問ねた。新藏は卷莨を喫しながら、不平顏をして聽いて居つたが、

『金子の使ひ道は、花魁の身受をする爲に必要なんです、千五百圓では足りない位ですが、談判して負さすのです、花魁とすッかり約束して、今晩か明日中に、金子を持つて往く事になつてますから、どうか這度だけ出して下さい。』

と平氣な顏をして言ひ出した。この辭を聞いた兩人は、餘りの莫迦々々しさに、互に顏を見合して呆れ返つた。

『お前さん、それは正氣で言つて居るのかい、笑談も好加減に言ふものです、莫迦莫迦しい、花魁なんか受出して、何うする量見なの？第一何うして養つて行く覺悟なんです、生た人間は人形と違つて、御飯も頂けば衣物も着せなければならな

いよ、氣でも狂つて居るのぢやないかい。』

とお角が冷かすやうに言つた。山浦も其尾に附いて、

『眞箇正氣の沙汰とは思はれないね、そんな事に使ふ金子なら、故々口を利に來るのぢやなかつたよ、餘り莫迦々々しくツて物が言はれない。』

と蔑むやうに言つた。この辭を聞いた新藏は、忽ち態度を一變して、

『それぢやア、女郎を受出す金子は出して遣る事は出來ないと言ふのだね、出して下れなきや覺悟があるから、判然言つて下れ。』

『何と言ふ口の利方をするのです、全つきし破戸漢か土方風情のやうぢやありませんか、それで保科家の若樣と言はれますか、お愼みなさい。』

とお角は嚴として戒めた。新藏は耳にも懸けず、

『そんな事は何うでも宜いから、金子の返辭を判然と聞かして貰ひたい。それに依つて覺悟があるんだ。』

と鋭い權幕で言つた。

『那樣莫迦々々しい事に、千五百圓と言ふ大金が出せるものですか、まあ能く物を考へて見なさい、お前さんを世の中へ出したいために、私を始め叔父樣まで、どんなに心配してるか知れないぢやありませんか、親の心子知らずで、那樣事は少しも思はないで、放蕩の在ッたけを盡して、其上に女郎を受出すなんて、能くも鐵面皮に言はれたものだね、お前さんが然う言ふ事を言ひ出したり、致出したりするのは、畢竟私が身分不相應なお小遣錢を出すからの事だから、今後は一ヶ月十圓のお小遣錢より出さないから、然う思つて居らつしやい。』

『千五百圓の金子を出して下れないなら、男子の面目が立たないから、唯今此處に於て劇藥を服んで自殺するから然う思ふが宜い。』

言ふより早く懷中から、硝子瓶へ入つた、茶色の劇藥を取出した。お角はこの意外な態度に少からず愕かされて山浦の處置を仰ぐやうに、其顏を眺めた。山浦は呑み

込み顔に密と首肯いて、

『おい新藏、お前は屹度其劇藥を飲んで自殺するんだね。』

と聲に力を罩めて念を推した。

『男子たるべき者が、一端身受けすると堅い約束を致ながら、今更違約する事は出來ないから、金子を出して下れなければ、この劇藥を仰いで自殺して了ふさ、死んで了へば約束を實行しなくとも、責める人も笑ふ人もないからね。』

『腐れ女郎と約束して、それが爲に自殺するやうな安ッぽい生命なら、生て居たところが、何んの益にも立たないから、自殺するも宜いだらう、さあ見事自殺するなら、見物して居るから、其藥を服んで見な。』

と嘲けるやうに言つた。

『服んで見せるとも、金子が無ければ生て苦勞するより、死んだ方がどんなに增だか知れない、服んだ後に悔んだッて追附かないから、能く此顔を見て置けッ。』

と稱まで決心を示した後、瓶の口に手を添へた。お角は心も浮の空で、はら〳〵と氣遣つて居た。

『飲めるなら飲むが宜いが、服めば生命が無くなつて、此世と別れなくつちやならないよ、それを承知で服むものなら、決して制めは致ないから、服むが宜い。』

『その位な事は聞かなくつても承知の上だ。』

言ひつゝキルクの栓を脱つて、一氣に服み盡して了つた。お角は屹驚仰天して、

『久さんお前、大變な事をさせましたね、早く醫者へ電話をかけさせて下さい。』

と顔色を變へて周章騒ぐのであつた。山浦は藥瓶を取上げて、嗅いで見て居たが、忽ち微笑して、

『そんなに騒ぐ事はありません、こんな劇藥で人間が死ぬるものですか、こりやあ劇藥ぢやありません、番茶の濃いのです、どこまで人を食つてるか、愛憎が盡きるぢやありませんか。まあこの瓶の中を御覽なさい。』